
新米税務調査官尼寺務の奮闘日記

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新米税務調査官尼寺務の奮闘日記

【NNコード】

Z8946K

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

僕は尼寺務。H税務署の新人調査官だ。しくじってばかりで落ち込む毎日である。

短編をまとめました。完結済みです。

調査ファイル1 水無月葵探偵事務所の場合

僕は尼寺務。H税務署に配属されて一年目だ。個人課税部門で、税務調査を主な業務としている。でも、どうも性に合わない。

調査対象の事業主のところに行つてもうまく切り込めず、いつも何も見つけられないまま、調査日程が終了してしまう。

先輩や、上司である統括官にいろいろと指導をされたり、一緒に納税者の事業所へ行つたりするのだが、所謂コツが掴めず、喘いでいた。

「自分はこの仕事を向いていないのではないか？」

先輩に言つてみた事がある。すると、

「一年や二年で、そんな結論を出すな。もっと精進しないと叱られた。確かにそうかも知れない。」

そんな僕がこの仕事を続けたいと思ったのは、ある納税者との出会いがきっかけだった。

その人の名前は水無月葵。時代劇に出て来そうな雰囲気だが、彼女の仕事は探偵。興信所と呼ばれる事の方が多いだろう。

事業規模の割には、多額な所得税を納めていて、相当事業がうまくいっている印象を受けた。

一般的に、税務調査は起業して一、二年では行われる事はない。密告や何か特別な情報がない限り、あり得ないのだ。しかし、僕は何故か彼女に興味を惹かれ、ダメ元で調査をする事にした。

そして昨年の夏。起業して一年目であるにも拘らず、僕は水無月探偵事務所に調査の連絡をした。申告書には税理士の氏名がないので、自分で作成して提出したようだ。一般的に、関与税理士がいる場合、特別な場合を除いて、調査の連絡は顧問税理士にする。

「お電話ありがとうございます、水無月葵探偵事務所です」

女性の声が言った。僕は高鳴る胸の鼓動を何とか抑えつつ、

「私は、H税務署個人課税部門の尼寺と言います。貴事務所の税務調査にお伺いしたいのですが？」

「まあ、そうですの。まだ仕事を始めて間もないのと、いろいろと教えて下さい」

女性の声はとても丁寧だった。僕は更に、

「では日程ですが」

と切り出し、一寸間の調査をする事を告げ、電話を切った。
(電話に出たのが、水無月葵さんだろうか？ データだと、今年で二十六歳だな)

声だけでどんな人か判断するのは難しいが、とても知的な女性だと思った。普通税務署から電話があると、妙に謙つたり、逆に威張り散らしたりする人が多い。一番多いのは、

「何でウチになんか来るんですか！？」

と怒り出すタイプの人だ。こういう人が、一番困る。
水無月さんは、そのいずれのタイプでもない。ますます会いたくなつた。

僕は一体何をしに行くつもりなのか？ ふと冷静になつて考えた。しかし、納税額から考えて、何か出て来そうな予感がする。探偵事務所を軽く見るつもりはないが、一年連續で納税額が一千万円を超えているのは尋常ではない。行ってみる価値がある。本気でそう思つた。

そして数日後、僕は水無月探偵事務所があるグランドビルワンの前にいた。

「こここの五階か……」

緊張して来た。探偵事務所というからには、それなりに人をたくさん見て来ているはずだ。もしかすると、一筋縄では行かないかも知れない。思わずゴクリと唾を呑み込んだ。

一階のロビーからエレベーターホールへと向かう。どうしてかわ

からないが、このビルのテナントは五階の水無月探偵事務所のみのようだ。立地条件は悪くないのに、この空室の多さは気にかかつた。家賃はいくらくらいなのだろう? 水無月さんの家賃は、月五十万円だったが。

いろいろと気になってしまい、五階までいくのに随分手間取ってしまった。Hレベーターホールから探偵事務所の入っている部屋までは、外廊下で繋がっている。正面の大通りは、この辺でも指折りの交通渋滞を引き起こす地点だ。僕も納税者のところに行く時は、場合に寄つては署の車を使う事があるが、なるべく通らないようにしている道だ。もうすぐ九時半になろうとしている時刻だが、まだ渋滞は収まつていない。

「……」

そして遂にドアの前に来た。ドアフロンに手を伸ばした時だ。

「お待ちしておりました」

いきなりドアが開き、僕の前に女性が現れた。黒髪ストレートのロングヘア。黒目の多い大きな瞳。高過ぎず、低過ぎずの鼻。薄くて小さめの唇。アイボリー・ホワイトのスースを着た、美人だ。この人があの電話の女性だろうか?

「あ、あの……」

あまりのタイミングの良さに、僕は言葉が出なかつた。その女性は二コッとして、

「税務署の方ですよね? お時間、正確ですね」

「は、はあ」

僕はようやく落ち着きを取り戻し、上着の内ポケットから身分証を取り出した。

「H税務署個人課税部門の尼寺務です」

「水無月探偵事務所の所長で、水無月葵です」

「この人だ。この人が水無月葵さん。想像していたより、ずっと綺麗だ。そして、凄くいい匂いがする。」「どうぞ」

そう促されなかつたら、僕はずつとそこで妄想に耽つていたかも知れない。

「どうぞおかげになつて下さい」

中に入った。机が三つ口の字に並べられていて、真ん中が水無月さんの席だ。「所長」というプレートが立てられている。奥の席にもう一人、女性が座つていた。手前の席は誰も使っていないようだ。

「いらっしゃいませ」

その人も綺麗な人だ。水無月所長はキビキビした印象だが、その女性は穏やかな雰囲気である。机の上のコンピュータで何かを入力している。後で確認させてもらおう。僕はその女性に会釈して、机の手前に配置されている黒い革張りのソファに腰を下ろした。

通常、税務署の調査は、初日の午前中は、経営者の身上調査をする。いきなり帳簿類を見たりはしない。対象者の人となりを見て、どんなところに注意して調査をすべきかを判断するために話ををするのだ。何気ない一言から、とんでもない秘密が発覚する事もある。

「どうぞ」

辺りをキヨロキヨロ見ていると、もう一人の女性がコーヒーを出してくれた。素早い人だ。さつきまでコンピュータを操作していたはずなのに。

「失礼しました。私の部下の神無月美咲です。主に調査業務を担当しています」

水無月さんが紹介してくれた。

「宜しくお願ひします」

神無月さんは笑顔で挨拶した。この人も素敵な人だ。でも僕は断然水無月さんだな。

コホン。何を考へてるんだ。今は仕事中だぞ。

向かいのソファに水無月さんが座つた。ドキンとしてしまつ。やっぱり綺麗な人だ。

「では、所長さんの身上調査をさせて頂きます」

「はい。何でもお尋ね下さい」

主な内容としては、家族構成、未婚既婚の別、事業を始めるに当たつての経緯など、一見他愛もないような事を尋ねながら、相手の目の動きや、仕草を注意深く観察する。不審な点はその都度問い合わせ。その点が「うまくいけば、調査は成功したも同然なのだ。それくらい比重が大きなものなのである。

しかし、僕は完全に水無月さんに飲まれてしまつていた。肝心な事は何も聞き出せていない。水無月さんは何も拒否していないし、嘘もついていないようなのだが、僕はどんどん見当外れの事を聞かされていた。何故なのか、後で考えてもよくわからない。

「午前中はこの辺で。午後は帳簿類の方を見させて頂きますので」
僕はそう言いながら立ち上がった。

「あら、どうなさいましたの？」

水無月さんは不思議そうな目で僕を見上げた。

「あ、その、昼食をとつて来ます。一時には戻りますので」

「まあ、昼食ならもう頼んでありますのよ。」
さういってお口上上がり下さい

「えつ？」

原則として、調査に行つた先で食事を頂くのは、極力避けなければならぬ。調査対象が食堂やレストランの場合は仕方ないのだが、それでも代金は支払うのだ。そうしないと、公平公正な調査を実行できないからである。

「あ、あの、困ります。食事は外でとりますので」

僕がそう言つても、水無月さんは、

「そういう事は、いらっしゃる前に教えて下さらないと。頼んだものが無駄になりますから、いらっしゃりで食事して下さい」
「は、はア……」

出されたのは、高級割烹の豪華な弁当だった。こんなのが、代金いくつするんだ？ 自腹で出すの、辛いなア。

「い、頂きます」

「どうぞ」

水無月さんも同じものを食べるようだ。僕は彼女と差し向かいで食事する緊張と、高級弁当の代金が気になるのとで、全く料理を味わう余裕がなかった。

「あれ？」

ふと目を上げると、いつの間にか水無月さんは食事を終えていて、神無月さんと仕事の話をしている。そんなに時間が経つたのか、と思つて腕時計を見たが、まだ十一時五分だ。どういう事なのだろう？　水無月さんは弁当を食べなかつたのか？　お膳は片づけられているから確認はできないが、それにしても何かこの事務所、普通ではない感じがする。

「あ、あの」

僕は食事を終えると、水無月さんに声をかけた。

「あ、おすみでしたのね。美咲、お茶を差し上げて」「はい」

神無月さんが給湯室の方へと歩いて行く。僕はそれを見てから、「あの、これいくらですか？　お金を支払わないといけませんの」「そんな、いいですよ。税務署の方からお代を頂くなんてできませんから」

水無月さんは一ヶ口りしてそう言つてくれた。個人的にはそれはとても嬉しい言葉だつたが、公務員としては決して受け入れてはいけない言葉なのだ。

「そういう訳にはいきません。規則ですから。お支払い致しますので。おいくらですか？」

「そうですか」

水無月さんは給湯室から戻つて來た神無月さんに、

「ねえ、あのお弁当、いくらしたの？」
と尋ねた。小声だつたが、聞こえてしまつた。

「一万円です」

「うわ……。やつぱり……。そのくらいしそうだと思つた。弱つたな、そんなにお金持つてないぞ。どうしよう、払いますって言つ

た手前、困った事になつたぞ。

「あ

そんな事を考えていると、水無月さんが僕の前に座つた。

「お弁当の代金なんですけど」「は、はい」

聞こえていた事を悟られないようにしなくては。僕は表情に気をつけた。

「五百円です」

「はッ?」

僕は耳を疑つた。どういう事だ? でも、水無月さんがそう言つたのなら、そう思うしかない。まさか、「一万円と言つてましたよね」

とは言えない。いや、正直言いたくない。そんな心境だった。「え、でも、そんな安くないですよね?」

僕はそれでも良心が咎めて、そう言わずにはいられなかつた。すると水無月さんは微笑んで、

「このお弁当は当事務所で尼寺さんに販売したのです。ですから、五百円ですよ」

「はあ。しかしですね……」

僕はそれでは申し訳ないと思つた。

「何でしたら、領収証を切りましょうか?」

「……」

僕は彼女の笑顔に負けてしまつた。

「はい」

財布の小銭入れから五百円玉を取り出し、「ご馳走様でした」

「ありがとうございます」

その時、僕の指先が彼女の手の平に触れた。冷たい。冷たかつたが、僕は火傷したと思うくらい、身体が火照つた。思わず顔を下に向ける。

「どうされたんですか、お顔が赤いですよ？」

水無月さんが僕の顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫です」

神無月さんがしてくれたお茶を飲み、僕はつい溜息を吐いてしまった。

「ふう」

また水無月さんが僕の顔を覗き込む。

「お疲れなんですか？」

「あ、いえ、そんな事は……」

と答えるながらも、実はヘトヘトになっていた。この女のせいで……。

そして僕は、水無月さんにいろいろ訊かれ、話す必要がないような事まで言つてしまい、最後は彼女と別れた事まで喋つてしまつた。

「あら、もうこんな時間」

水無月さんのその声に僕は我に返つて腕時計を見た。わああ、三時だ！ 何て事だ！

「す、すみません、ずっと話し込んでしまって……」

「いえいえ。何をお出しすれば宜しいですか？」

水無月さんは楽しそうに尋ねた。完全に遊ばれている気がして來た。

「出納帳と、証憑書類と、請求書、領収書を。それと、今日現在の現金残高を教えて下さい」

「わかりました」

それにしても、さつきから時間の感覚がおかしい。どうしたのだろう？

「え？」

僕は出納帳を見て驚いた。入金と出金の相手先、摘要は細かく記入されているのに、現金残高が全く書かれていないのだ。慌てて提出された申告書を広げてみる。決算書の貸借対照表の現金残高もゼロになつていて。

「あの、今日現在の現金残高を教えて下さい」

僕は水無月さんを見て言った。彼女は楽しそうな顔で僕を見ていたが、

「現金はありません。ゼロです」

「……」

やられたか？ これはかなり手強い人だぞ。

現金残高がゼロという事は、事業所としての収支は全て水無月さん個人を通しているという事。簡単に言ってしまえば、入金と出金の詳細を辿り切れない可能性があるので。

「事業用の預金通帳はありますか？」

「ありません」

水無月さんは二口二口して話す。

「水無月さんの個人名義の通帳は？」

「それもありません」

「……」

お手上げ寸前だ。どうしたらいいのだらう。

「では、水無月さん個人の手持ち現金はどこにありますか？」

「こちらです」

水無月さんは立ち上がり、自分の机に向かった。僕も後についた。

「この中です」

彼女は一番下の引き出しを開け、中から小ぶりのハンドバッグを出した。

「どうぞ、お改め下さい」

「は、はい」

僕はバッグを受け取り、机の上で中身を確認した。

「！」

息を呑んだ。ザッと見ただけで、一千万円くらいある。これを毎日持ち歩いているのだろうか？

「数えてみて下さい」

水無月さんは、微笑んだまま僕を促した。僕は唾を飲み込んで、札束を机の上に出した。職業柄、札束を見たり数えたりするのは慣

れでいるが、この時ばかりは酷く緊張した。何かの罠か、と思つてしまつたのだ。

しかし、それは僕の思い過ぎで、何もなかつた。札束は、一千二百万円あつた。

「現金をこんなに持ち歩くのは非常に危険ですよ」

僕はいつもの指導事項を話した。

「できるだけ手持ち現金は少なくして、大きな支払は小切手か振込みでなさつた方が、効率もいいはずです」

「私共の仕事は、振込みや小切手が使えない相手が多いのです。ですから、通帳も小切手帳も使わないので」

つまり、裏社会という事か？ 情報屋とか、垂れ込み屋とかは、現金がいいだろうからな。

「ですが、依頼人も振込みを希望される方がいるでしょう？」

「そういう方は、お断りしていますので」

「……」

研究されているのか？ それとも偶々（たまたま）なのか？ 全部現金取引だとすると、もうこれ以上調べる事ができない。金融機関に裏を取る事も無理だ。但し、彼女が嘘を吐いていて、本当は預金がある可能性も考えられる。それは明日当たつてみよう。

「時間になりましたので、今日はこれで帰ります。明日は、請求書関係を見させていただきますので」

僕はグッタリして立ち上がつた。

「わかりました」

水無月さんも立ち上がつた。その時、僕は神無月さんのパソコンに気づいた。

「それはインターネットもできるのですか？」

「はい」

神無月さんも笑顔で答える。

「ではその料金の支払はどうしていますか？ 普通クレジットか、

通帳から引き落としですか？」

やつた。尻尾を掴んだ。そう思つた。しかし、ダメだった。神無月さんが言つた。

「ああ、これは無料です。プロバイダーがクライアントさんなんです。調査費と相殺で、十年間無料です」

契約書を確認したが、その通りだつた。完全敗北か？ しかし、諦めてなるものか！

「わかりました。ではまた明日参ります」

僕は水無月探偵事務所を出た。

そして翌日。僕は再び水無月探偵事務所を訪れた。請求書と領収書、そして顧客との契約書を全部調べたが、何も見つけられなかつた。

こちらはまさに「水も漏らさぬ」という表現がピッタリの状態だつた。さすが探偵事務所、というところか。

出向く前に水無月さんの個人資産を調べたが、定期預金はあるが普通預金すらない。他人名義でしていれば探すのが難しいが、それはないだろう。あの人はそんな小細工はしない。多分、本当に預金はないのだ。そんな気がする。

ただ、念のため法務局で調べたら、あのグランドビルワンは彼女が所有する土地に不動産会社がビルを建て、彼女が借りている形になつていた。何故そんな事をするのか理解できないが、何も不審な点はない。

一つだけ、気になる事がある。それは彼女自身だ。恋人はいるのだろうか？ いるだろうな。あれだけの容姿で、事業家でもあり、相当な人脈もあるようだから。僕なんか、相手にもしてくれないだろつ。

「尼寺さん」

帰りがけに水無月さんが声をかけた。

「はい」

僕は何だろうと思つて振り向いた。

「今度は、個人的にお会いしません？」

彼女は誘うような目で僕を見ている。危うくその気になりそうだったが、何とか公務員としての節度を守れた。

「それは致しかねます。僕が、貴女の住所地の管轄でない税務署に移動になつたら大丈夫です」

「まあ、結構言いますのね、尼寺さんも」

その時の彼女の笑顔は、多分一生忘れられないくらい素敵だった。

そして、現在。

僕は再び水無月探偵事務所に行こうとしている。リベンジ。そう言えば聞こえがいい。確かにその思いもある。しかしそれ以上に、僕は彼女の笑顔を見たくて仕方がなかつたのだ。

「調査官失格だな」

そう呟き、僕はエレベーターに乗つた。

その日は茹だるような暑さだった。

僕はH税務署の職員、尼寺務あまでらうとむ。昨年までは個人課税部門に所属していたが、今年度からは法人課税部門に異動した。そして、世間一般ではあまり好かれる仕事ではない「税務調査」を主な仕事としている。先日調査に行つたところは、経営者が強したたかで、肝心なところで何も見つけられずに終わった。

今回僕が調査対象に選んだのは、ここ何年かで、この不景氣にも関わらず、グングンと業績を伸ばしている建築板金業だ。特別何か不審な点があるとは思わなかつたのだが、社長の役員報酬が月額にして七十万円で、奥さんの役員報酬も、月額換算で四十万円。少々過大役員報酬の臭いもしたので、起業から五年目というのもあり、数ある法人の中から選んでみた。

そして調査日当日。僕は申告書の束を鞆に詰め込み、署を出た。あまり「申告是認」ばかりが続くと、僕の能力が問われる事になる。そろそろ正念場だつた。

申告是認とは、調査に入つたが、何も間違いや不正がなかつたという事だ。本当はそれに越した事はないのだが、それは建前で、本音は「何も出ないのは調査官の実力の問題」と評価される。だから僕は焦つていたのかも知れない。

調査対象の法人に到着した。自宅の敷地の一角に別棟で事務所を建て、光熱費等もしつかり分けてあるようだ。小規模法人の多くは、個人の支出と法人としての支出を明確に線引きできていないところが多い。端的に言つと「財布を分けられていない」のだ。税務調査では、その辺をついていくのが基本である。特に建築板金などの場合、自宅の板金を行つて、売上に計上しない事がある。これは法人税法ばかりでなく、消費税法にも抵触する問題なのだが、大抵の小

規模法人はその辺がおろそかだ。今日はそこを念入りに調べようと思つていた。

社長の自宅の屋根や樋を見ると比較的新しいので、最近工事した可能性がある。これはいけるかも知れないと僕は内心思つていた。普段は自宅にいると聞いていたので、自宅のドアフォンを押す。すると奥さんが顔を出し、続いて顧問税理士事務所の担当の人が顔を出した。

（あ……）

何とその子は、高校の同級生だった。しかも、僕が片思いしていた藤村蘭子なんだ。事務所の制服なのだろうか、紺のスーツが眩しい。スカートの下は「生足」で、白の靴下だ。思わず唾を飲み込みそうになる。

「ああ、やつぱり尼寺君ね。珍しい苗字だから、そうじやないかと思つたんだ」

「あら、藤村さんのお知り合い？」

奥さんが驚いた顔で言つ。するとその後ろから社長が現れ、

「なら安心だな。今日は何も出ないだろ？」

などと、【冗談とも本気とも取れる事を言つた。僕は眩暈^{めまい}がしそうだつた。

奥さんは藤村さんに僕の事を根掘り葉掘りと聞きまくり、いつまで経つても事務所に移動しようとはしない。そこで、僕は思い切つて切り出した。

「あの、そろそろ調査を開始したいのですが……」

「ああ、ごめんなさいね、私一人で盛り上がりちゃつて」

奥さんは大声で笑いながら、サンダルを履くと、向かいにある事務所に歩き出した。僕はそれに続いた。藤村さんと社長が後ろから話しながら来る。

「税務署に同級生がいるのだから、もう大丈夫だね、藤村さん」

「それは関係ないですよ、社長」

藤村さんが困り顔で答え、僕を見た。僕は社長を見て、

「税務署も税理士事務所も、馴れ合いの組織ではありませんので、

ご承知置き下さい」

すると社長は「ヤーヤして、

「わかつてゐよ、山寺さん」

「尼寺です」

社長はそんな僕の肩をポンと叩き、先に事務所に入つて行つた。

「尼寺君」

藤村さんが小声で話しかけて來た。何だろ？？

「今日も、仕事終わつてから会えない？」

「え？」

僕はドキッとした。好きだった人からの誘い。いや、そんな風に
考へてはダメだ。

「話があるの」

藤村さんは「コツとして付け加えた。

「取り敢えず、仕事ね」

彼女は僕を追い越し、事務所に入つて行つた。

調査はまず社長個人の身上調査から入る。家族構成、起業の経緯
などだ。でも、その大半を答えたのは、藤村さんだつた。彼女はこ
の法人を担当して三年目で、家族構成から子供の進学先まで、あら
ゆる事を把握していた。年の暮れから始まる年末調整も引き受け
いるので、扶養控除等申告書で知つたのだろう。一般の会社員の人
は、あの書類すら頭痛の種で、毎年経理担当の人にせつつかれてい
る人も多いと聞く。

いけない。藤村さんに圧倒されている。僕は何とか主導権を握ろ
うといろいろ尋ねてみたが、悉く藤村さんに「ブロツク」された。
「では、午前中はこの辺で。午後は帳簿類を見させて頂きます」
僕はそう告げて、席を立つた。

「尼寺君」

藤村さんが僕を追いかけてきた。

「何?」

「一緒に食事しない?」

「え?」

「またドキッとする。断る理由はない、と言いたいところだが、担当税理士事務所の職員と一人きりでの食事はまずい。一いちらも相手方も複数人なら問題はないのだが。

「大丈夫よ、税務署に言つたりしないから」

「いや、別にそんな事は……」

僕はそれを心配しているのではない。もう昔の事とは言え、かつて好きだった人と食事するのは緊張するのだ。

結局僕は藤村さんに押し切られ、近くのファミレスで一緒に食事する事になった。

「でも驚いた、尼寺君が税務署に勤めてるなんて。全然同窓会とか来ないから、どうしているのか知らなかつたし」

「ああ」

僕は高校の同窓会は出たくない。当時苛められていたのだ。苛めていた奴の中に、藤村さんを好きな奴がいた。藤村さんもそいつの事が好きだったのだ。だから余計出る気になれなかつた。

「あ、ごめんね、私ばかり喋っちゃつて……。何か、懐かしくてさ」

藤村さんの笑顔は素敵だつた。あの頃と少しも変わつていない。

「いや、僕、話すの得意じゃないし……」

「フーン。変わつてないね、尼寺君は」

「そうかな」

彼女は昔話に花を咲かせていたが、どれも僕にとっては辛い思い出で、只愛想笑いをして聞いているだけで精一杯だつた。

やがて昼休みの時間は終わりに近づき、僕達は席を立つた。支払を済ませようとすると、

「ここには私が出すわ」

と藤村さんが伝票を僕の手から取り、レジに行つてしまつた。そし

て後から僕の分を渡そうとする、

「今日は尼寺君に会えた記念に、私が奢るわ。またいつか奢つて

「いや、でもや……」

僕は慌てた。それはまずいからだ。

「大丈夫よ。一人だけの秘密にしておけば。ね？」

藤村さんの強引さとその「ね？」の後の笑顔に負け、僕は承諾した。

そして調査午後の部が始まる。出納帳、請求書、納品書、契約書とあらゆる書類が用意された。僕はそれを一つ一つ慎重に調べた。

「たな卸しの原簿はありますか？」

たな卸しの原簿とは、仕入れて使わずに残った材料などを決算期末に数えた時の書類だ。一般的に「正」の字を書いて数えたものを指す。清書した物ではなく、あくまでその場で使った物をみせてもらうのが鉄則だ。

「はいよ」

社長が机の引き出しから取り出し、藤村さんに渡した。藤村さんはそれをパラパラと見てから、

「はい」

と僕に差し出した。

「ありがとうございます」

僕がそう言うと、奥さんが、

「山寺さん、お堅いのねえ。藤村さんとはお友達なんでしょう？ そんな畏まらなくてもいいのに」

「あの、尼寺です」

「あら、ごめんなさい」

奥さんはゲラゲラ笑った。社長もこの人も悪い人ではないのだろうが、あまりにも無神経過ぎる。

「奥さん、例え親友でも、仕事とプライベートは区分けするのが、真の公務員なんですよ」

藤村さんが助け舟を出してくれた。

「藤村さんも彼氏いないそうだから、付き合つちゃえば？」

唐突に奥さんが切り出す。え？ 藤村さん、あいつと別れたの？

それより、何故僕は彼女がいない事を前提にされていのだろう？

「奥さん、そういう話はやめて下さい」

藤村さんは微笑んでいたが、迷惑なのだろう。僕は、

「話を戻していいですか？」

と奥さんの脱線を修正した。

「は、はい」

奥さんはさすがにまずいと思ったのか、居すまいを正して僕を見た。

「申告書には、仕掛品のたな卸しも書かれていました。そちらの元になる書類はありますか？」

仕掛品とは、未完成の工事にかかった原価と、それに付随する諸費用をたな卸しと同じく、集計した物だ。完成前はたな卸し資産と同様のあつかいとなり、原価から差し引く処理をする。所謂期末在庫と同じだ。

「出面帳があります。材料や外注は、現場毎に請求明細があります」藤村さんがすかさず答えた。出面帳とは、現場で働いた作業員の出勤簿の事で、これは給料の計算に使われる。

「ではそれを見せて下さい」

社長が机から取り出し、藤村さんに渡す。藤村さんがそれをチラツと見て、僕に差し出す。

「……」

細かい。社長の身上調査でも感じたが、この社長、見た目は豪胆な人だが、商売に関してはかなり神経を使うし、計算高い考えを持っている人のようだ。

「原価計算表もあります。ご覧になりますか？」

奥さんに変な事を言われたせいか、藤村さんはすっかり口調が変わった。

「はい」「

僕も愛想笑いをせずに答える。

調査は淡々と進んだ。どの帳簿も完璧に近く、付け入る隙はなかつた。

（また申告認か……）

僕は憂鬱になつた。

「時間ですか？」

上の空の顔をしていた僕に、藤村さんが声をかけた。

「あ、はい。また明日参ります」

挨拶をすませ、早々に事務所を出た。今度は藤村さんは声をかけて来なかつた。

重い足取りで署に帰つた。明日、何か出来来る可能性は薄い。どうしたものか？ 先輩に話して、同行してもらおうか？ それとも上司の統括官に？ それも気が滅入る。自分の無能さを曝け出すようなものだ。

あれこれ考え、報告をすませ、僕は署を出た。

「え？」

門の脇に、藤村さんが立つていた。

「お疲れ、尼寺君」

「あ、お疲れ様」

僕は顔を引きつらせたように作り笑いをした。

「行きましょうか」

「え？」

藤村さんはそう言つと歩き出した。僕は何も返事をできないま、彼女を追つた。

「ここでいい？」

藤村さんは、近くの喫茶店の前で立ち止まつた。

「うん」

拒否する理由はない。僕は藤村さんに続いて、中に入った。藤村さんは奥のボックス席に行き、壁を背にして座った。僕はその向かいに座る。

「「めんね、強引で

「え、いや、別に」

強引でも藤村さんと話せるなら構わない。すっかり仕事モードをオフにした僕はそう思った。ウエイトレスが来てオーダーを取る。

藤村さんは紅茶、僕はコーヒーを頼んだ。

「尼寺君、頑張ってるわね。私、今日、ドキドキしたの。いろいろ指摘されたらどうしようつて

「そ、そなんだ」

例え嘘でも、そんな事を言われると嬉しいものだ。

「それでね」

藤村さんが切り出す。その時、ウエイトレスが紅茶とコーヒーを持って来た。藤村さんはウエイトレスが立ち去るのを待つて、

「実は尼寺君にお願いがあるの」

「え？」

何だ、お願ひって？ 僕は心臓の鼓動が彼女に聞こえてしまつのではないかと心配になつた。

「今日調査に入った会社は、これからなの。私、三年かけて、社長と奥さんの考え方を軌道修正してきたの。もう一息なの」

「え？」

何が言いたいのだろう？ 藤村さんの顔は、真剣そのものだ。

「あと少しで、あの会社は完全に全うな会社になるわ

「そう」

僕は思わず冷たい返事をした。しかし藤村さんは気にせず、だから、明日仮に何か見つかっても、田を瞑つて欲しいの

「！」

そういう事か。何かと思えば……。田溢し^{あふぎ}しりとこう事か。

「お願い、尼寺君、私を助けて

藤村さんはまさしく懇願するような目で僕を見ている。

「今、調査で何か指摘されてしまうと、あの二人はまた元に戻ってしまうわ。将来的には、あの会社はもつと伸びる。だから、今は待つて欲しいの。必ず、優良法人にしてみせるから」

藤村さんは本気だ。本気で僕を説得しようとしている。でも僕の答えは決まっていた。

「無理だよ、藤村さん。そんな話には応じられない」

「そう」

藤村さんの顔つきが変わった。

「わかった。もう頼まない。また明日、会いましょう」

彼女はサッと伝票を持ち、レジに歩いて行った。僕はすぐに追いかけ、その手から伝票を取り、「こ」は僕が払うよ

と言った。

次の日、藤村さんは喫茶店の事を忘れたかのように普通に接してきた。僕も何事もなかつたかのように応じた。

結局、何も見つけられなかつた。帰りがけに見た藤村さんの顔は忘れられないだろう。明らかに僕を見下していたのだ。でも、彼女にどう思われようと構わない。僕は僕の信念で動いたのだから。

「く……」

しかし、署に戻り、トイレの個室に籠もると、泣いてしまった。何が悲しいのか、悔しいのか、考える事もできないほど、涙が止まらなかつた。

でも僕は続ける。辞めろと言われるまで、この仕事を続けたい。誇りを持つてできる仕事をだから。

僕は尼寺務。^{あまでらうとむ} 税務署の職員。法人課税部門で、主に会社の税務調査をしている。しかし、まだまだ修行が足らず、税理士事務所や訪問先の法人にあしらわれている。そんな訳で、辛い日々が続いている。

トライアウトになりそうなくらい酷い目に遭つた事を引き摺つていた僕は、「近藤力税理士事務所」が担当している法人の調査を回避していた。そこは、僕の高校の時の同級生である藤村蘭子さんがいるからだ。彼女は優秀な税理士事務所の職員で、他の調査官も彼女の担当している法人では、ほとんど申告是認を余儀なくされていた。僕もその中の一人だ。

申告是認とは、調査をしたが、何も誤りも不正もなかつたという事である。言い方を変えれば、「税務署の敗北」とも言えるかも知れない。納税者側から見れば、それに越した事はないのだが、もしそれが調査をした職員の力量のせいで発覚しなかつただけだとすれば、やはり問題なのだ。大局的に見れば、眞面目に納税している他の納税者や法人が割を食つているという事にもなるからだ。

そんなある日、僕はある法人の調査に行く事になった。法人の事業は飲食業。最近メキメキと売上げを伸ばし、店舗を改装して事業を拡大しているラーメン店だ。社長はまだ三十代の若さで、従業員は五人。しかし、前年度の売上高は、税抜きで五千万円を超える。一店舗としては結構大きな売上げだ。

何がある、と思った訳ではない。飲食業の場合、よくあるのは、社長や奥さんの自家消費分の計上漏れだ。要するに、自分達が食べたラーメンやその他の料理の売上げを計上していないケースだ。お金のやり取りをしていないと、ついつい忘れてしまう事だが、これ

も売上げに計上するのが正しい税務処理なのだ。そこを調べて行けば、連敗記録も止められるのではないかと思った。もちろん、自分の成績ばかりを念頭に置いて調査をするつもりはなかつたが。

「顧問税理士は実相寺沙織さんか。聞いた事ないな。新しく税理士になつた人だろうか？」

僕はその税理士の先生を調べてみた。まだ若い女性だ。昨年開業したばかりらしい。それなのに関与先が数十軒あるようだ。どうやら、親御さんが税理士で、暖簾分けという形で関与先を引き継いだらしい。僕はその先をもう少し調べれば良かつたのだ。今となつては後の祭りなのがだが。

そして調査当日。僕はそのラーメン店を訪問した。定休日に来て欲しいという社長の願いを聞いたので、店は閉まつており、従業員は誰も来ていません。裏口から入るように言われていたので、店の横の狭い路地を進んだ。

「H税務署法人課税部門の尼寺と言います」

僕はドアを開いて顔を出した女性に身分証を提示した。どうやら奥さんらしい。ラーメン店の人らしく、愛想がいい。

「お待ちしてました。どうぞ」

僕は店内に足を踏み入れた。そこは厨房だった。店は休みだが、仕込みは休みではないらしく、社長らしき人が大きな鍋の前で何回もスープの味見をしていた。

「あんた、税務署の方が見えたわよ」

奥さんが声をかける。すると社長は振り返り、

「もつと大きな会社を調べりやいいだろ？ 何でウチみたいな小さいとこを虐めるんだよ！？」

といきなり喧嘩腰で怒鳴つて来た。このパターンは慣れて來たが、それでもいい気持ちはしない。

「社長、そういう事は言わない方がいいですよ」

「え？ 今の女性の声は？ 嫌な汗が出る。嫌な事を思い出す。

「尼寺君、久しぶりね。まだ調査官しているの？」

皮肉タップリの事を言いながら、厨房に現れたのは、封印したい記憶の元凶である藤村蘭子さんだつた。

「あ、あ、ど、ど……」

呂律が回らない。藤村さんはクスッと笑つて、
「どうして私がいるのかつて訊きたいのね？」

「あ、ああ……」

まだ口が回らない。藤村さんは腕組みをして、
「近藤先生のお嬢さんが税理士になられたのよ。それで、一時的に
応援という形で、私がサポートしているの」

「……」

悪夢だ。避けたつもりが、思い切り命中してしまつた。

「何だ、藤村さんの知り合い？」じゃあ、大丈夫だね
社長は手の平を返したようにこやかな顔で僕を見た。今の言葉、
まるで、デジャヴだ。

「私の知り合いだという事は関係ありませんよ、社長」

藤村さんはニヤツとして社長を見た。それからまた僕を見て、
「でも、何もでないのは確かでしょうね」

「……」

侮辱とも取れる言葉だが、何も言い返せない。最初から圧倒され
てしまつていて。またダメなのか？ そんな感覚が頭の中を占めて
行く。

甦りそうな悪夢を振り切り、僕は調査を開始した。

厨房では手狭なので、店のテーブルを一つ借りて場所を作り、社
長、奥さん、藤村さんは、一つ隣のテーブルに陣取つた。周囲を見
回すと、芸能人のサインやら、表彰状やらが並んでいる。神棚には
客商売には欠かせない招き猫があつた。

「では、社長さんにお尋ねしますね」

僕がそう切り出すと、社長はニヤツとして、

「まあ、形式だけなんでしょ？ もう調査は終わったようなもので

すよね、山寺わん

「尼寺です」

どうしてみんな、「山寺」と思つのだらう。確かに珍しい苗字かも知れないけど。

そして、社長の身上調査を開始する。家族構成、開業に至った経緯など。ここからいろいろ社長の人となりを見て行くのだが、第一印象が悪いので、何か隠しているように見えてしまう。さつきも、僕がサインや表彰状を眺めていた時、ソワソワしていたような気がするのだ。

何がある。そう思つた。しかし、その何かがわからない。藤村さんは相変わらず冷静な目で僕を見ている。

「何でも訊いてごらんなさい。全部私が答えてあげるから」そんな風に見えた。考え過ぎだらうか？

今回の調査は、一日だけだ。開店している日には、社長も奥さんも立ち会えないというのだ。だから僕は、身上調査を早めに切り上げ、帳簿類を見せてもらつた。奥さんは簿記ができるらしく、出納帳は完璧に近い。数字を間違つた時に「見え消し」もしてある。「見え消し」とは、訂正した数字がわかるように赤のボールペンで一本線を引き、その上に正しい数字を書き入れる方法だ。そのために、あらかじめ書き込む数字を行の三分の一くらいに押さえておく。それもきつちりやつてある。奥さんの性格もあるのだろうが、この辺も藤村さんの指導が行き届いているのだろう。

帳簿類は隙がない。奥さんと藤村さんの見事な連係プレーで、僕は何も見つけられなかつた。と言つより、実際何もないのだらう。また失敗したか？ また嫌な汗が出る。

「お昼はどうする、尼寺君？」

藤村さんが尋ねて來た。

「え？」

あの時の記憶が……。

「山寺さんも煮え切らない男ねえ。藤村さんが誘つてゐるのに、ほん

やつしちやつてさあ「あ

奥さんが突拍子もない勘違い発言をした。僕はビックリして奥さんを見た。苗字を間違われた事を指摘できなくくらい動搖している。

「そうよ、尼寺君。私に恥を搔かせないで」

藤村さんまで悪乗りして来る。まずい、ますます飲まれて行く……。

「そ、行きましょつか」

藤村さんは僕を強引に外に連れ出した。

「どこで食事する?」

彼女はまるで「デート」にでも出かけたかのように嬉しそうに言った。

そして、

「あ、いけない、携帯忘れた。ちょっと待つてね」とワインクまでして、戻った。僕は藤村さんに遊ばれている。そう思つた。

今回は、別に昔話もせず、妙なお願いもされず、じくへ普通に会話をした。

「税務署には、若い女の子もいるんでしょ? じうなのよ、尼寺君」「相手にしてもられないよ

「フーン、そうなんだ」

藤村さんの笑顔はどこか怖い。何だらう? ふとそう思つた。
「じゃ、私が立候補しちゃおうかな、尼寺君の彼女に

「!」

僕はギョッとして彼女を見た。藤村さんはからかう様子もなく、僕を真っ直ぐ見ている。

「何、私じゃ不満そうね?」

「いや、そんな事は……」

藤村さんはこれほど乗りが軽い子ではなかつた。性格が変わったのだろうか? それとも男と別れて、白葉になつていてるのか?
「じゃ、考えて。私、待ってるから

「……」

藤村さんは一ノッとして立ち上がった。

「戻ろつか」

「う、うん」

「どういう事だらう？ 本当に僕に氣があるのか？ いやそんなはずはない。うーん、わからない、彼女の考えが。

店に戻ると、

「どうだつた？」

と奥さんが興味津々の顔で訊いて来た。藤村さんは一ノッコリして、
「振られちゃいました」

「まあ！」

「い、何で自惚れた奴だ、という田で、奥さんが僕を睨む。
ち、違いますよ」

僕は慌てて否定したが、奥さんは取り合わない。

「こんな男、やめといた方がいいよ、藤村さん」

「そうですね」

藤村さんは笑顔で応じた。ああ。僕は完全に悪役だ。
「山寺さん、女の子にはもうちょっと優しくした方がモテるぞ」
社長が小声でアドバイスしてくれた。

「はあ……」

苦笑いするしかなかつた。

僕は気を取り直して椅子に座り、帳簿に目を向けた。

（あれ？）

店全体に何か違和感を覚えた。何だらう？

（気のせいか）

僕は再び帳簿を見た。予想していた自家消費は、月末毎に社長と
奥さんの分がしつかり現金で徴収されていた。ダメだ。藤村さんに
そんな手抜かりはない。僕は絶望的になつた。

「従業員さんの賄いはどうなつていますか？」

「給料に加算してあります。もちろん、その分は売上に計上してあ

りますよ」

藤村さんは勝ち誇ったように答えた。だよな。そんな事で見つかるほど、藤村さんは甘くない。

（もしかして、またやってしまったのかな？）

何もない法人を調査した？ そんな気がして来る。でも、あの午前中に見た社長のソワソワは何だったのだろう？ もう一度僕が店内を見回しても、社長は慌てていない。

（さっきの違和感は？）

そうだ。店に戻った時のあの感覚。僕は靈感なんてないと思うが、何がおかしいと思ったのは事実だ。

「！」

わかった。招き猫だ。神棚にあつた招き猫がなくなつていて。藤村さんをチラツと見ると、僕が何かに気づいたのを察知したらしく、ソワソワしている。

「招き猫がなくなつていますね」

僕が誰にともなく言つと、奥さんがガタンと立ち上がつた。

「奥さん、招き猫はどこにありますか？」

奥さんの顔色が見る見るうちに悪くなる。社長も落ち着きなく貧乏振りをし出した。藤村さんは僕を見よつとしない。

「招き猫なんてありませんよ。何言つてるんですか、山寺さん」

奥さんは見え透いた嘘を吐いた。藤村さんがハツとして奥さんを見る。なるほど、そういう事か。

藤村さんが僕を食事に誘つた理由。^{わけ}僕を店から連れ出し、招き猫を隠させるため。その指示を出すために、「携帯忘れた」と嘘を吐いて店に戻つたのだ。そして、僕の集中力と観察力をそぐために「彼女に立候補」などと動搖を誘つ事を言つた。

酷い。そこまでするか、普通？ まあいい。これで同情も何もないらなくなつた。

「ですか。僕の見間違つたんですかね？」

僕は椅子を持ち、神棚に近づいた。社長が慌てて立ち塞がる。

「ダメです、社長！ 妨害行為になりますよ」

藤村さんが叫ぶ。社長はギクッとして僕に道を開けた。僕は椅子の上に立ち、神棚を見た。

「招き猫の大きさくらいに、埃ほいが着いていなことがあります。ついさっきどけられたようです。何があつたか、教えて下さい」

「そ、それは……」

社長と奥さんはすっかり動搖してしまい、藤村さんを見た。

「招き猫がありました。『らんになりますか？』

藤村さんは観念したのか、そう言つた。

「はい。是非」

僕は椅子から降りて答えた。

結局、招き猫の中から五百円硬貨が二十万円分出て來た。従業員の給料明細は二重に作られていて、額が操作されていたのだ。一日千円徴収していたが、税理士事務所には五百円徴収した形の明細を見せていた。

この場合、売上と給料で利益は相殺されるので、法人税は発生しないが、消費税は計上漏れとなる。この店は、簡易課税制度を選択しているからだ。簡易課税制度とは、一定規模以下の中小事業者が選択により、売り上げにかかる消費税額を基礎として、仕入れにかかる消費税額を簡易的に計算できる仕組みのことだ。一定規模とは、法人の場合は前々事業年度における課税売上高が五千万円以下であることを指し、なおかつ簡易課税制度選択届出書を事前に提出している免税事業者を除く事業者に適用される。要するに売上漏れは即消費税計上漏れとなる。但し、この店の場合、前年度の課税売上が五千万円を超えてるので、来年度からは本則課税に移行する。

本則課税とは……。まあ、いいか。

給料の源泉所得税は、従業員に渡した方で計算していたため、彼らには迷惑がかからずにするんだので、それだけは社長と奥さんはホッとしていた。しかし、この隠し方は悪質だ。延滞税だけでなく、

重加算税の対象になる。故意による過少申告だからだ。

「重加算税に関しては、上司と相談してお返事いたします」

僕は一人が修正に素直に応じたので、そこまで非情になるつもりはなかつた。

型どおりの挨拶をすませて、僕は店を出た。

勝つた？ いや、そんな感動はない。むしろ、何とも後味が悪い。何だろう？ あれほど調査で不正や誤りを見つけたいと思っていたのに。

「あーあ

ようやく辿り着いた山頂で、大して感動が味わえない登山者の心境だつた。

「え？」

その時、携帯が鳴つた。見た事がない携帯の番号だ？ 誰だろう？

「はい」

「尼寺君？」

藤村さんだつた。何だろう？

「ありがとう」

「え？」

何故礼を言われるのかわからない。

「どういう事？」

僕は頭の中が疑問だらけになり、尋ねた。

「あの社長、ウチを舐めていたのよ。若い女の税理士だから。全く聞く耳持たないと言つた。困つていたの」

「そう」

僕は素つ気なく言つた。

「以前は小銭なんて全部抜いていたらしいわ。でも、それだと現金の残高が不自然になるからと説得して、ようやく帳簿面だけはまともになつたの。招き猫のお金も、さつき気づいたのよ」

「ふーん」

僕の言い方は意地悪だつたかも知れない。

「ねえ、尼寺君、その言い方、私に対する仕返し?」

藤村さんが尋ねた。

「そう聞こえるのは、藤村さんに心当たりがあるからじゃないかな
僕は更に意地悪な言い方をした。」

「そうね。貴方にはもっと酷い事したかもね」

「そうさ。僕を動搖させようとして、あんな嘘を吐いて
そうだ。まだ足りないくらいだ。そう思つた。」

「酷い。尼寺君、あれ、嘘だと思つていたの?」

藤村さんの声が震える。え? まさか? ?

「いや、その、あの?」

僕は藤村さんが泣いてしまったと思い、慌てた。

「うつそー。その通りよ。貴方を動搖させようと思つて嘘を吐いた
わ。」(めんなさい)

「……」

言葉がなかつた。

「まだどこかの会社で会いましょう。次は負けないわよ」

「ああ」

気のない返事をして携帯を切つた。まだまだダメだ。今回は調査
は成功したが、藤村さんには負けた。そんな気がした。

でもバカな僕は、本当は藤村さんは泣いていたのかも知れない、
などと懲りずに妄想してしまつた。

調査ファイル4 ある法人調査の場合

僕は尼寺務。H税務署法人課税部門勤務の、新人税務調査官だ。仕事がどうもうまくいっていない。法人の調査に行くが、何も見つけられない事の方が多い。

高校時代の同級生で、片思いの相手でもある藤村蘭子さんが、ある税理士事務所にて、彼女と調査で顔を合わせてからますます調子が悪くなつた。藤村さんとのやり取りは僕にとつてトラウマなのだ。

「はあ」

僕は自分の席で大きな溜息を吐いてしまつた。

「どうした、尼寺？ 元気がないな」

上司である統括官が声をかけて来た。僕は作り笑いをして、「いえ、そんな事はないです、統括官」と答えた。しかし、統括官はニヤリとして、

「いや、お前、顔に霸気がない。仕事に迷いがあるな？」

「え、いや、そんな事は……」

「最近、調査がうまくいっていないからか？」

統括官に隠し事は無理だ。素直に頷く。

「そうか。よし、次は私が同行しよう。調査はお前が進めろ」「え？」

それはそれで拷問に近い。後ろで統括官が見ていると思うと、余計調査がうまく行かなくなる気がする。

そして結局、僕は統括官と一緒に法人の調査に出かけた。

「私も新人時代には苦労したものだ。しかし、それがやがて自分にとっての財産になる。今が踏ん張り時なんだぞ、尼寺」「はい」

路地を歩きながら、統括官がアドバイスしてくれた。

今日調査に入るのは八百屋だ。個人経営から起業し、株式会社になつたところである。売上も消費税課税事業者になるほどで、調査対象の年度も消費税を支払っている。事業規模も比較的大きい方だ。「いいか、尼寺。この法人は、法人とは言つても、自宅と店舗が一つになつてゐる。そういう形態で一番注意すべきは、家事関連費だ」「はい」

家事関連費とは、家賃や電気代や電話代などの個人用と業務用が混在しているものの事だ。その区分けがしつかりできていない法人が多いので、調査の時、一番気を配るところなのだ。

「それも、ポイントを外してしまつと、何も見つけられない。そこでいかに見極められるかだ」

「はい」

やつぱり統括官の話はとても勉強になる。
やがて僕達は、対象法人の店の前に着いた。

予想通り、調査は散々だつた。担当税理士本人が立ち会つていたため、あいまいな指摘をすると、

「それは法律の条文、あるいは国税庁の通達のどこに書かれていますか、尼寺さん？」

と指摘を受ける。その都度、僕はオタオタしてしまい、統括官に救いを求めてしまつた。

家事関連費に関しても、事業と個人の割合は正当で付け入る隙がない、建物は社長個人の所有で、きちんと賃貸契約を取り交わしており、家賃も法外に高いものではなく、標準的なものより若干低く設定されている。社長も家賃収入を不動産所得として、役員報酬と合わせて確定申告をしていた。完璧だ。

「はあ」

統括官が隣にいるのに、うつかり溜息を吐いてしまつた。

「そうへこむな、尼寺。指摘事項は悪くはない。相手が上手だつたんだよ」

統括官の慰めの言葉が身に沁みる。

「はい、今度こそ、頑張ります」

すると統括官は僕の前に立ち、

「その考え方はおかしいぞ、尼寺

「は？」

急に厳しい表情になつた統括官に、僕はギクッとした。

「税務調査とは、対象法人のミスをあげつらうものではない。正しい納税知識を知つてもらうためのものだ。その考え方では、いつまで経つても一人前になれんぞ」

統括官の言葉に、僕はハツとした。

調査法人の顧問税理士は敵ではない。同じ税務の仲間だ。調査対象の納税者は犯罪者ではない。国の財政を支えてくれる存在だ。それを忘れかけていた。何とか間違いやミスを見つけようとしていて、肝心な事があろそかになつっていたのだ。

「申し訳ありません、統括官。以後、気をつけます」

「それでいい。あまりいろいろ一人で思い悩むな、尼寺。先輩の調査官も、私もいる。いつでも相談に乗るぞ」

「はい」

僕は嬉しくなつて大きく頷いた。統括官も微笑んで、

「私の主な仕事は人材の育成だ。お前たちのような若い世代が育たないと意味がない。一歩ずつでいい。確実に前進しよう」

「はい」

あれほど落ち込んでいた僕は、晴れ晴れとした気持ちで署に戻つた。

そして数日後、僕は一人である法人の調査に出向いた。

そこの税理士事務所の担当者は、まだ新人のようだ。歳も僕とそれほど変わらないと思う。

「よろしくお願ひします」

僕はその担当者に挨拶した。

「よ、よ、よろしくお願ひします」

かなり緊張しているようだ。目が落ち着きなく動いている。聞けば、一人で調査に立ち会うのは初めてらしい。

(僕もこんな時があつたな)

自分の初調査の時を思い出す。彼の初々しさが微笑ましくなつた。一人での立会いは初めてでも、税理士事務所に勤務してからは数ヶ月が経過しているから、帳簿類は見事に整理されていたし、不自然なところはなかつた。大したものだ。

「！」

しかし、一つ気づいた事があった。これは税理士事務所の会計監査では気付きにくいかも知れない。

「領収書の番号が飛んでいますね、奥さん」

僕は机から顔を上げて、経理担当の社長夫人を見た。税理士事務所の担当者は、途端にピクンとなり、奥さんを見た。

「え、あの、その、えーとですね……」

あからさまに慌てふためく奥さんを見て、僕は残念ながら確信してしまつた。

「切り取つたんですね、奥さん？」

あくまで穏やかに指摘する。奥さんは消え入りそうな声で、

「はい……」

と答えた。税理士事務所の担当者は、すっかり舞い上がつてしまい、オロオロするばかりだつた。彼もまた、「寝耳に水」だつたのだろう。

「それはどこにありますか？」

僕は席を立ち、奥さんに近づいた。

「い、ここにあります」

奥さんは、お茶菓子が入つていてる大きな缶を差し出した。なるほど、こんなところに保管していたのか。

「確認させて下さー」

「はー」

もう奥さんはすっかり小さくなってしまい、僕の顔を見よつとしない。担当君も口をポカンと開けたままで、何も言わない。

領収書の「抜き」は、毎月日常業務的にこなす税理士事務所の会計監査の盲点を突いたものだった。巧みと言えば巧みだが、結局こうしてわかつてしまうのだから、どれほど無意味な事か理解して欲しい。

抜かれた領収書の合計金額は、占めて三十万円。人一人を雇えるくらいの額だった。

「これは同時に役員報酬と看做されます。社長の所得税の修正申告もしていただく事になりますよ」

本当ならこの「抜き」の額は、役員報酬の中でも法人の経費にならない「役員賞与」に認定するべきだが、額も少額で、奥さんの態度も協力的だったので、そこまではしたくない。統括官への報告にはその旨も入れる事にした。

要するに、隠した三十万円は消費税の課税漏れだけではなく、役員報酬としての経費も否認する場合があるという事だ。しかも、過少申告加算税や延滞税、場合によっては重加算税も追徴され、隠した金額など吹き飛んでしまう。脱税は割に合わないのだという事をしつかりと心に留めて欲しい。

僕は奥さんに社長を呼んでもらい、税理士事務所の担当者も含めて、今回の件を説明した。社長は反抗するかと思ったが、「見つけてもらつてよかったです。もし気づいてもらわなければ、味を占めて続けていたらもうから」と言つてくれたので、ホッとした。

僕は署に戻り、統括官に報告した。

「そうか。そのフォローの仕方は良かった。尼寺、よくやつた」「ありがとうございます」

僕は深々と頭を下げた。

「これからもその調子で仕事をしてくれ

「はい」

やつと一歩踏み出せた。そう思った。

そして帰宅時。珍しく、携帯が鳴った。しかもこの着信音は……。
(まさか……)

もう一度とかかってくる事がないと思っていた人からだ。

藤村蘭子さん。僕の高校時代の片思いの女性にして、仕事上の最大のライバル。

何だろう? 何の用だろう? 僕はドキドキして出た。

「もしもし」

「ああ、久しぶりね、尼寺君。元気そうね。『活躍、聞いているわ』藤村さんの声は相変わらず耳に心地良い。聞き惚れてしまう。

「ありがとうございます、藤村さん。で、『ご用件は?』

僕はつい、そんな愛想のない応対をしてしまった。藤村さんのクスクス笑う声が聞こえる。

「何よ、畏まつて。そんなに私の事が怖いの?」

怖くないと言えば嘘になるが、そんな事は言えない。

「そ、そんな事はないよ。そう聞こえたのなら、謝ります」

「それよ、それ。その言い回しが、そういう印象を与えるのよ、尼寺君」

確かにそうかも知れない。しかし、どうしても彼女と話すと、卑屈になる自分がいる。

「尼寺君も忙しいだろうから、手短に言つわね
「うん」

僕は思わず涙を飲み込んだ。

「今日、尼寺君が調査に行つた法人の担当者、私の従弟なの
「ええ! ?」

僕は仰天した。何、それ?

「随分と、可愛がつてくれたみたいね、彼を? この仕返しは必ずさせてもらつから、覚悟していくね」

「いや、その、別に、そんな……」

情けないが、すっかり狼狽^{うるた}えている。すると藤村さんが笑い出した。

「「ごめん、ビックリした？ 脅かすつもりはなかつたんだけど、尼寺君があまりナイスリアクションだつたから……」

堪え切れないという感じで、藤村さんは笑っているようだ。

「彼にはいい勉強になつたらしいわ。貴方に感謝してたわよ

「そ、そう」

ホツとした。藤村さんに「仕返し」なんて言わると、本当に寿命が縮みそうだ。

「今度飲みにでも行かない？」

「え？」

「何よ、私とは飲みに行けないの？」

藤村さんは相変わらずだ。

「私、もう貴方の税務署の管轄の関与先を担当していないから、大丈夫よ。心配ないわ」

「あ、そう

それなら断る理由はなさそうだが、何故か怖い。

「また連絡するね」

そして通話が切れた。

「はあ」

まだ彼女に振り回されている僕。あれ？ でも、飲みに行かないつて言ったよな？

期待していいのかな。

いや、過度な期待は、その反動も大きい。

僕は気長に藤村さんからの連絡を待つ事にした。

調査ファイル5 杉並自動車板金塗装の場合

僕は尼寺務。H税務署勤務の税務調査官だ。先日、ようやく満足の行く調査ができる、一步前進と思ったのだが、二歩後退しそうだ。

それは何故かといふと……。

「ええ!? 統括官の上司だつた人ですか?」

僕は、つい大声を上げてしまつっていた。

「そうだ。若いうちに税務署を辞めて、税理士に転進した人で、あちこちの税務調査官が泣かされている。とにかく、こちらの手の内を知り尽くしているからね」

いつもは僕を励ましてくれる統括官が、とても弱氣だ。

「調査、やめた方がいいですか?」

僕はすっかり怖気づいていた。調査に入る予定の法人の担当税理士に連絡した後にそんな事を言われればテンションが下がってしまう。

「そんな事できる訳ないだろーー 馬鹿な事を言つな、尼寺!」
統括官は僕の気の抜けた顔を見て怒鳴つた。

「も、申し訳ありません!」

慌てて頭を下げ、謝る。

「まあ、胸を借りるつもりでいくしかない。あまり気負わん事だ」「は、はい」

僕はそう言われて少しだけホッとした。

「だからと言つて気を抜くなよ、尼寺。お前は個人で行くのではない。税務署を代表して行くのだという事を忘れるな」「はい」

また緊張して来た。嫌な汗が出る。

そして調査当日。対象法人は有限会社杉並自動車板金塗装だ。板金の腕が良くて、『ティーラーからも依頼があるらしい。社長は昔かたぎの職人、息子はよくできた』一代目。絵に描いたような優良企業なのだが、ここに調査に来たのには理由があった。

この法人と取引のある自動車販売の個人店に調査に入つた同僚から、妙な話を聞いたのだ。

「おかしいんだよ。杉並板金てさ、領収証が二種類あるんだ」

「領収証が二種類ある。確かに臭う。でも、何もないかも知れない。『それもさ、社名が印刷されている領収証は社長か専務のサインがあるんだけど、市販の領収証は決まって『杉並』の認印なんだ』

その怪しい領収証の発行主は、社長の奥さんだった。詳細は不明だが、どうやら奥さんが入金分を流用しているらしいのだ。

杉並板金には何がある。そう思つて勢い込んで調査の連絡をしたのに……。

何も出ないかも知れない。そんな風に思つてしまつた。

「ごめん下さい。H税務署の者ですが」

杉並板金は、自宅の前に工場と事務所がある。僕は工場の中に足を踏み入れ、そこにいたつなぎ姿の社長と専務に声をかけた。

「おう、いらっしゃい」

気さくな社長がにこやかな顔で応じてくれる。

「こちらへどうぞ」

専務の息子さんも、愛想がいい。何だか気が引けて来る。

「お待ちしてましたよ」

事務所に通されると、ソファに座つていた好々爺といった感じのスーツを着た男性が立ち上がつた。

奥から奥さんが出て來た。緊張しているのが見て取れる。あの販売店から、何か情報が入つてているのだろうか？

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

「安達税理士事務所の安達です」

僕は身分証を提示し、安達税理士は名刺を差し出す。

「社長にこちらに来るよつに伝えて下さー」

安達さんは名刺をテーブルの上に置きながら、奥さんに言った。

「は、はい」

奥さんは妙にソワソワしながら、事務所から出て行く。

「上司から聞きました。安達先生は、ウチの『出身だそつで』
僕は向かいのソファに座りながら切り出した。

「そうです。でも、もう何十年も前です。私も知つた顔も少なくな
りましたよ」

温厚そうな人だ。「税理士となる資格を有する者」としては、税
理士試験に合格し二年以上の実務経験を持つ者、二十三年以上税務
署に勤務し指定研修を受けた国税従事者（要するに税務署OB）、
公認会計士、弁護士があり、税理士名簿への登録を受けることによ
つて「税理士」となり、税務を行う事ができる。安達さんは、税務
署出身の税理士だ。先日出会つた敵意剥き出しの税理士とは違う。
あの人は試験に合格して税理士になつた人らしいから、余計敵対意
識が強いのかも知れない。税務署は納税者の敵ではないのだけど。
その辺を勘違いしている人は、思つた以上に多い。

やがて杉並社長が事務所に入つて来て、身上調査を開始する。中
学を卒業してそのまま近所の板金業者に就職。仕事を一通り覚えた
頃にその経営者が他界。子供達が事業を継がないため、杉並さん
が引き継ぐ形になつた。

しかし、事業は順風満帆とは行かず、結局その業者は倒産してし
まう。

失意のどん底にあつた杉並さんを救つたのが、当時その業者の一
番の取引先だつたディーラーだつた。杉並さんはディーラーの支援
を受けて「杉並板金」を開業した。

初めは厳しい日々が続いたが、やがて仕事は軌道に乗り、稼げる
よつになつたといつ。そして、息子さんが跡を継ぐ事になつたので、
安達先生の勧めもあり、法人にしたとの事。

苦労人だ。僕には眩しくらいの人だ。

「それでは、帳簿類は午後に見せていただきますので」

僕はそう言って席を立ち、事務所を出た。

いつになくやりにくい。社長と専務は本当にいい人で、全うな仕事をしているのがわかる。問題は奥さんだ。来た時から、一度も僕の顔を見てくれない。後ろめたい事があるとしか思えない。そして、その事を社長も専務も知らないようだ。安達先生はどうなのだろう？ 気づいているのだろうか？ それとも、僕が事務所を出た後、奥さんに尋ねただろうか？

そんな事をいろいろと思い巡らせていると、たちまちお昼休みは終了した。

（もし、僕が安達先生の立場だったら、どうするかな？）
ふとそんな事を考えてみた。

そして事務所に戻る。安達先生達の顔を見渡すが、特に何もわからぬ。奥さんは相変わらず僕を見てくれない。何も話していないのだろうか？

「では、帳簿類を見せていただけますか？」

僕のその言葉で、奥さんがビクッとしたのがわかった。安達先生が立ち上がり、奥さんに近づく。

「それと、それと、それ。あと、そっちの棚のものも」

先生が的確に指示する。奥さんがあたふたしているのを見かねたようだ。

「ど、どうぞ」

奥さんがテーブルに帳簿類を並べた。相変わらず僕の顔を見ない。嫌われてるのかなと思つてしまつ。

「？」

噂に聞いていた市販の領収証がない。どうしよう、何て切り出せばいいのだろう？ 取り敢えず、出されたもののチェックを始める。

出納帳、元帳、請求書、納品書、たな卸し表と、帳簿は一見完璧

だ。只一つ、市販の領収証を除いて。

「これだけですか？」

僕はカマをかける作戦に出た。何かを知っている事を匂わせるのではなく、奥さんの動搖を誘うのだ。自分からボロを出させないと。「こ、これだけです」

奥さんは僕の目を見ないで答えた。安達先生が、「何か、ご不審な点でも？」

と間に入るよう尋ねて来る。奥さんの不自然な様子に気づいたのだろうか？

「いえ、別に」

ここはとぼけよつ。しかし、次の一手がない。僕は事務所の中を見回す。

「…」

同僚から聞いた個人の販売店のカレンダーがある。僕はそれをジツと見た。安達先生は僕のその行動に意味があるとは思わなかつたようだ、何も聞いて来ない。しかし、奥さんは違つていた。落ち着きなくキヨロキヨロし、僕を見たり、カレンダーを見たりしている。「このカレンダーなんですけど」

僕は世間話でもするように言った。

「は、はい」

奥さんの声がいつもより甲高いので、社長と安達先生がハッとして見る。

「このお店とは取引が多いよつですね」

「は、はい」

安達先生と社長が顔を見合わせる。

「尼寺さん、どういう事です？ 何がお知りになりたいのですか？」
安達先生が堪りかねたように切り出した。

「いえ、別に。カレンダーをくれるくらいだから、上得意なんだろうなと思つただけです」

どうやら、安達先生は何も知らないよつだ。奥さんは顔色が悪く

なっている。

「領収証なんですか？」

僕は奥さんを真っ直ぐに見て言った。奥さんの顔が更に硬直する。

「もう一種類ありますよね？ それはどこにありますか？」

「いえ、あの、その……」

奥さんは完全に目が泳いでしまっていた。社長は何の事か全くわかつていないうちだが、安達先生は何かに気づいたようだ。

「領収証はこれだけですよね、奥さん？」

あの温厚そうな安達先生が顔を紅潮させて僕を睨んで言った。

「いえ、あのその……」

奥さんが口籠るので、今度は社長が、「おい、どういう事だ？ 何で答えない？」

と奥さんに詰め寄った。

「社長、落ち着いて。ここは私が」

安達先生が慌てて社長を止める。社長はますますわからないという顔になる。

「尼寺さん、領収証がもう一種類あるところのは、どうこの事ですか？」

「詳しい事はお教えできませんが、奥さんがご存知なんですか？」

一斉に視線が奥さんに集まる。奥さんはパニック寸前だった。

「あ、あの……」

それからまもなくして、奥さんは全部詰してくれた。集金した金を全部会社にいれずに、パチンコに使ってしまった事を。売上を誤魔化していたのではないので、結局修正申告には至らなかつたが、奥さんの年末調整をやり直してもらう事にはなりそうである。使つたお金を給料として加算し、所得税の計算をし直すのだ。

「お前なあ」

苦労を共にして来た社長は、呆れた顔をしたが、怒つたりはしなかつた。

「金が欲しいなら、俺に言え。使い込みなんてするなよ、みつともない」

「はい」

奥さんは社長の優しい言葉に泣き出してしまった。僕もいたたまれなくなってしまった。

「では、私はこれで」

僕はすぐに事務所を出た。何だか、僕のせいで奥さんが悪者になつてしまつたので、後味が悪かつたからだ。

「尼寺さん」

安達先生が追いかけて來た。

「は、はい」

何か言われると思い、僕は緊張した。すると安達先生はにこやかな顔で、

「いい調査官になつて下さいよ。期待します」

「は、はい！」

安達先生はそれだけ言つと、右手を挙げ、事務所に戻つて行つた。もしかすると、安達先生は、ずっと税務署にいたかったのかも知れない。そんな気がした。

帰署し、統括官に報告をした。

「そうか。安達さん、元氣だつたか」

「はい。いい勉強になりました」

統括官は僕を見上げて、

「あの人は、本当は国税査察官（所謂マルサ）になる話があつたほどの人だ。でも、家族のために諦めたんだよ」

「え？」

統括官の話に、僕はギョッとした。そんな凄い人だつたのか。

査察官は国税の花形だが、激務だ。家族を犠牲にする事も多いと聞く。安達さんは自分の地位より家族を選んだという事か。

「安達さんに期待されてるんだ、頑張らないとな、尼寺」

「はい」

「凄いプレッシャーかけないで下さい、統括官。僕は泣きそうだった。

「ふーん。凄いじゃない、尼寺君」

向かいの席でほろ酔い加減の藤村さんが言つ。僕は「念願」叶つて、高校時代の片思いの女性である藤村蘭子さんと「デート」……。ならないのだが、そういう色っぽい状況ではない。ここは居酒屋の座敷の一つだ。全然そんな雰囲気ではない。周りは仕事帰りの酔っ払い達だけだ。

「飲んでる、尼寺君？」

「う、うん」

藤村さんは、結構飲めるようだ。僕はビール一杯でクラクラしてしまつただが。

「私も、税務署に行けば良かつたなあ。今更遅いけど藤村さんは、焼酎の水割りをグッと飲み干した。

「尼寺君はさ、査察目指すの？」

「僕は無理だよ」

慌てて否定する。藤村さんはニヤーッとして、

「激務だもんね、査察つて。家に帰れない事なんてザラらしいし」

「そうみたいだね」

僕は溜息を吐いた。

「私と仕事、どっちを取るのよー？」

そんな事を言われる立場になつてみたい。無理だけど。

「私は、大丈夫だよ」

「え？」

「何を突然？ 完全に出来上がつてゐる、藤村さん？」

「私は、仕事優先OK。全然、気にならないよ……」

意味不明の事を言い放ち、藤村さんは潰れてしまった。ビール五杯、焼酎の水割り七杯。凄いなあ。

ようやうする藤村さんを何とかタクシーに乗せ、僕も寮に向かう。

『私は、仕事優先OK。全然、気にならないよ』

『どういう意味なんだろう？ 私は貴方が家に帰つて来なくても大丈夫？ まさかね。私ならそんな激務でも大丈夫、だろうな。どうしても前向きに考えられない僕だった。』

調査ファイル6 対馬不動産の場合

僕は尼寺務。H税務署勤務の税務調査官だ。最近、ようやく仕事に自信が持てるようになった。

そして今日も業務である法人の調査に出かける。

そこは以前から脱税をしていると噂の不動産会社だつた。社長がいくつもの法人を設立し、それをうまく動かして利益の操作をしていると聞いた事がある。但し、それはあくまで噂であつて、関連法人や取引先法人を調査して、何かが出て来た訳ではない。

「尼寺、焦らなくていい。何か一つでもいいから、見つけてくれ」

先輩にそう言われた。かなりのプレッシャーである。

「はい」

そう返事をするしかない。胃に穴が開きそうだ。

調査対象法人は、対馬不動産。社長は対馬暢之氏。四十五歳。不動産業界では、やり手と評されている。昔は地上げ紛いの事もしていたようだ。只、今は至つて温厚な仕事をしているようだが。それも表面上だけかも知れない。

そして、関連企業は壹岐建設。こちらは、対馬社長の義兄である壹岐忠則氏が社長を勤めている。関連企業と言つても、株は互いに有してはおらず、法律上は全くの別企業である。そこがまた質が悪いのだ。

税法は、子会社や同一役員がいる法人に対する規制を設けているのだが、この二社はそれに該当していない。壹岐建設を調査した調査官の話では、実権は壹岐氏ではなく、対馬氏にあるらしい。しかし、対馬氏は株主にもなっていないし、役員にも入っていない。とにかく、一筋縄ではいかないのだ。

関連企業はそれだけではない。伊都設備。これは水周りの設備を販売取り付けする会社だ。壹岐建設の下請け会社だが、これも子会

社ではない。株の持ち合いはしていないし、役員の重複もないのだ。しかし、伊都設備の代表取締役は、対馬社長の奥さんの妹の夫である伊都真澄氏。関連性は自明なだが、法律上何もできない。

普通、そういうた親族繋がりの法人は、誰かが欲を出したり、裏切つたりで、大概綻びが生じるものだが、彼らに限つてはそれはない。対馬社長が余程怖いのか、それとも本当に団結力があるのか、崩れそうにないのだ。

更に、それらの法人は、全て管轄の税務署が違うのだ。それも大きなネックになっている。縦割り行政の弊害。自分達が勤務する官庁をそんな風に言うのもどうかと思うが、僕は間違いなく縦割り行政が彼らを利するものとなつていて考えている。

そしてもう一つ付け加えると、この三社は決算月が違う。対馬不動産は六月決算八月提出、壱岐建設は三月決算五月提出、伊都設備は十月決算十一月提出。利益の先送りが無限にできてしまう仕組みだ。しかも、合法的に。

切り込む隙があるとしたら、そこだ。人間は必ずミスをする。書類上の手続きミスで、それが明らかに架空の取引で、利益の先送りだという事が判明すれば、このからくりの全貌を暴く事もできる。

僕は急に気分が高揚して来て、対馬不動産のあるビルの玄関に着いた時は、

「絶対に見つけてやる！」
と決意していた。

対馬不動産は、雑居ビルの五階を賃借し、そのフロアを全て占有している。登記簿を調べても何も見つからないのだが、本当のビルのオーナーは、対馬暢之氏らしい。その辺りも抜け目がないようだ。フロアは全て繋がつていて、反対側に僅かなスペースの「社長室」とプレートが貼られた別室があるだけだ。社員の動きを瞬時にして把握したいという対馬社長ならではの考え方なのだろう。これでは社員は息が詰まるのではないか？ その辺りにも突破口があると良い

のだが。

「お待ちしておりました」

フロアの入口の脇にあるソファに座っていた胡麻塩頭で紺のスースを着た男性が立ち上がった。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

僕はすぐさま身分証を提示した。相手の男性は、名刺入れを内ポケットから取り出すと、

「税理士の藤間です。よろしく」

と僕に向けて差し出した。僕は身分証を胸のポケットにしまって鞄を床に置くと、名刺を両手で受け取る。

「よろしくお願ひします」

藤間税理士は、そのまま歩き出して、

「社長は奥でお待ちです。どうぞ」

と言い添えた。僕は藤間さんの名刺を右手に持ち、鞄を左手に持つと、慌ててそれに続く。途中、僕と目が合つた社員がにこやかに会釈する。挨拶には相当五月蠅いのだろう。僕ら税務署の人間は、多くの法人の場合、愛想良くされる事が少ないのだ。ちょっとだけ嬉しかつたのは、確かだ。

「おお、いらっしゃいませ」

社長室のドアを藤間さんが開くと、机でパソコンのマウスを操作していた対馬社長が立ち上がった。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

「対馬です。どうぞお手柔らかに」

型通りの挨拶をすると、社長は名刺を携え、僕に近づく。

「税務署の方には、まさに釈迦に説法でしょうが、土地や建物をお探しの際には、どうぞ当社をご利用下さい」

「はあ」

僕は調査日当日にそんな営業をされた事がなかつたので、一瞬呆気に取られたが、鞄を置き、名刺を受け取った。

「どうぞ」

社長に促され、ソファに座る。藤間さんと社長の名刺をテーブルの上に並べた。

「ウチは眞面目に仕事しますよ。税金もたくさんではないけど、納めていますしね」

社長はニヤニヤしながら、藤間さんと向かいのソファに座る。すると藤間さんが、

「社長、山寺さんは別に御社を疑つて来た訳ではないですよ。任意調査ですから、何年かに一度はあるのですよ」

「ほつ

藤間さんが「山寺」と言い間違えたのは気づいたが、もうその手の事は気にしない事にしている。僕が「尼寺」だろうが「山寺」だろうが、調査に支障はないからだ。

「ま、いずれにしても、あまり厳しく攻めないで下さいね、尼寺さん」

僕は只苦笑いをただけで、返事はしなかった。社長はまだニヤついていたが、目が鋭くなつた気がする。しかも、僕の名前はしっかり把握している。本当に切れる人なのだ。藤間さんは、この法人のごく一部しか知らないのだろう。このタイプの経営者は、例え税理士にも全てを話しているとは思えないからだ。

「では、早速、社長の身上調査をさせていただきますね」

僕は長いインターバルは危険だと判断し、そう切り出した。藤間さんは驚いたようだ。

「仕事熱心ですねえ、山寺さんは。もう始めますか？ お茶でも飲んでからにしませんか？」

それは社長の言つ台詞でしょ、と突つ込みたくなる。この人も、対馬社長が全部話してくれていない事は理解しているのかも知れない。だから、こんな呑気な雰囲気なのだ。

「いや、先生、私も時間が惜しいですから、すぐに取りかかつてもらつた方がいいです」

社長はそう言つてから僕を見た。笑顔だが、目が笑っていない。

よく聞く事だが、今の対馬社長はまさにそれだつた。余裕の笑顔の裏には、警戒の炎が燃え上がっているのか？ 僕は慎重に行こうと思つた。そして、ここは型通りの身上調査。社長の経歴や、会社を起こした時の経緯などを尋ねる。

「失礼します」

そこへ、秘書らしき女性がお茶をトレイに乗せて入つて來た。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

女性はお茶を出すとそのまま退室した。僕はそれを確認してからちょっとしたジャブを繰り出した。

「昨年度の終盤に、社長の車が廃車になつていますが、どうされたのですか？」

ジツと社長の顔を見たが、想定内の事なのか、全く表情が変わらない。

「いやあ、ちょっとぶつけてしまいましたね。修理するにも大金がかかるという事で、廃車にしました」

「代わりの車を購入されていないようですが、不便ではないですか？」

僕の更なる指摘にも社長は動じていない。

「この不景氣で、ウチも資金繰りが厳しいのですよ。車はリースにしました。その方が安上がりですの」

「なるほど」

このジャブは空振りだ。社長は、僕の思い込みかも知れないが、一矢りとしたように見えた。

「では、帳簿類を見せて下さい」

「わかりました」

社長は自分の机の上のインターフォンを操作し、

「書類を持ってきてくれたまえ」

「はい」

女性の声が応じた。

「やはり、ここ数年は厳しいですね、不動産業界も。私達は、今生き残りを懸けて戦っているところなんですよ」

社長はソファに戻りながら言った。僕は頷きながら、

「そうですか」

とだけ答えた。その時、女性三人がダンボール箱を持って入って来た。経理の担当者達だろうか？

「取り敢えず、三年分と伺っておりますが、それでよろしかったですか？」

目の前に置かれたダンボールを見て、社長が尋ねる。その答えを待つように、女性達が僕を見る。

「はい。時間が限られていますので、そのくらいで」

「わかりました」

社長が田で合図をすると、三人の女性達は会釈をして退室した。「それにしても、先生や尼寺さん達には感心します」

「は？」

藤間さんと僕は、異口同音に声を発してしまった。何の事だ？

「毎日数字と睨めっこしている」職業の方には、敬意を表します

「社長は微笑んで言つ。しかし、心からそう思つていかない事は僕にはわかつた。

「なるほど、そういう事ですか」

藤間税理士の呑気さは、もしかして演技なのかと疑つてしまつた。

しかし、対馬社長も不動産業なのだから、数字と睨めっこする仕事だと思うのだが？ やはり、どこか人を食つたような物言いの人物だ。

僕はそんなどうでもいい事を頭から追い出し、早速前年度分の帳簿類を見始めた。片手で書類を広げ、片手でメモを取る。社長はその間、片時も僕から目を放さない。藤間さんは、ボンヤリとあちこちを見ている風だったが。

さすがに噂になるだけの事はある。不景気だと言つていたが、相当数の土地取引をこなしていて、決して資金繰りに困つているよう

には見えない。そして、不正をしている法人に多く見られる傾向だが、帳簿類に訂正箇所が一つもない。これは、間違ったところを見え消し（訂正する数字を赤の一本線で消す事）するのではなく、一ページを丸ごと差し替えている可能性がある。しかし、証拠がない。そう思われるだけでは、如何ともし難い。その上請求書や領収書関係は、不正の影すらない。

（ダメか、ここは？）

嫌な汗が出る。申告是認。調査をしたが、何も見つからなかつた時の事をそう言つたが、今回はその可能性が出て来た。こここのところ、調査を勝ち負けで区分けするのはおかしいのだが、一応連勝していたので、少しショックだった。

昼食を取つてから午後も詳細に帳簿に目を通したが、何も見つからない。唯一怪しかつた社長の車の処理も、間違いなく廃車されており、問題は見つからない。焦りだけが心中で増幅して行く。チラッと社長を見ると、不敵な笑みを浮かべて僕を見ていた。

（見つけられるものか）

そう言つてゐるやうに見えてしまつたのは、僕の僻みだろうか？

その時だつた。

「パパ、いる？」

不意にドアが開き、茶髪の女の子が入つて來た。容貌と「パパ」という言葉から、社長の娘だらう。身上調査で聞いた長女の美香さんと思われる。

「何だ、美香！ 誰が入つていいと言つたんだ！？ 今日は税務署の方が來ると伝えてあつただろつ！？ 今すぐ出て行け！ 家に歸るんだ！」

さつ今までの社長はどうかに行つてしまつたのかとこいつら一、対馬社長は激高していた。

「え、え？」

美香さんはまさかそれほど怒られるとは思つていなかつたのだが

う、オロオロしている。

「私の言つた事が聞こえなかつたのか！？ とつとと家に帰れ！」
社長の剣幕に気づいたのか、さつきお茶を持つて来た女性が慌てて駆け込んで来て、

「美香さん、さ、ひちりく」

と彼女を連れ出した。

「いやあ、申し訳ない。礼儀知らずで困つた娘です」

社長はまた穏やかな顔に戻つていた。藤間さんを見ると、彼も仰天しているようだ。

「あ、いえ、そんな……」

僕も一緒に怒られた気分だった。

結局、僕は何も見つけられないまま、対馬不動産を出た。

（何だらう、このモヤモヤは？）

何か引っかかる。どうしてだらう？ 何か不自然な感じがする。そうだ。社長のあの変貌ぶりは異常だつた。問答無用で怒鳴りつけ、何も言わせずに娘を追い返した。あれは、絶対に何がある。美香さんが何か知つてているのか？ しかし、美香さんは扶養家族で、役員になつていない。社長夫人すら役員に名を連ねていないのでから、当然だらう。ではどうしてあれほど美香さんを怒鳴つたのか？ 僕はその理由を考えた。

「あれ？」

ふと目を上げると、ビルの地下駐車場から出て来る黒塗りの乗用車が見えた。

「美香さん？」

若い子には不似合いの黒塗りの大型車だ。その時、僕の身体は電気に打たれたようになつた。

「そういう事か！」

僕は大急ぎで署に戻つた。そして、陸運事務所に電話をした。

翌日、全てがわかつた。

僕の睨んだ通りだつた。美香さんの乗つていた乗用車は、廃車した社長の車だつたのだ。つまり、廃車は偽装で、すぐに新しいナンバーで登録をし直し、それを自家用車としていたのだ。まさに抜け穴だつた。これはすなわち、「減価償却資産の除却損」を偽装計上した事になるのだ。要するに脱税である。

社長が激高したのも頷ける。僕に車を見られれば、感づかれると思つたのだ。しかし、社長の願いも虚しく打ち碎かれた。父親にあまりにも理不尽に怒鳴られた美香さんは、あの後しばらく、車の中で友人達に愚痴メールを送り続けていたらしい。だから僕が引き上げる頃になつて、のこのこと駐車場から出て来たのだ。まさに「運の尽き」である。

こつして、対馬不動産は偽装廃車を突破口にいろいろと不正が見つかり、やがては国税局査察部（通称マルサ）まで動き出した。そうなると、僕ら税務署の調査官はお役御免だ。何も手出しできなくなる。それは別にいい。とにかく、不正が暴かれて良かつた。出世欲はない僕には、手柄をマルサに横取りされたという感覚はなかつた。

「最近、尼寺君、凄いわねえ。尊敬しちゃうわ」

酔つ払つて頬がピンクに染まつた藤村蘭子さんが言つた。例によつて、また居酒屋だ。憧れの人だつた蘭子さんと一緒に飲めるのは嬉しいのだけれど、本当はもっとお洒落なバーとかで飲みたいのだ。自分が下戸なのはわかつてゐるけど。

「運が良かつただけだよ。娘さんに感謝しないとね」

「謙虚ねえ。惚れちやいそ」

また始まつた。藤村さんの悪い癖。酔つと僕をからかう。やめて欲しい。僕はノミの心臓なのだから。

「そんな事言うと、本気にしそうだからやめてよ」

僕は藤村さんの発言はあくまで冗談という前提で言つた。

「本気にしてよ」

「え？」

驚いて聞き返すと、藤村さんは酔い潰れていた。またタクシーを拾つてあげないと。

藤村さんをタクシーに乗せ、一人寂しく寮へと歩き出す。

「あれ、本当なのかな？」

藤村さんの「本気にしてよ」の声は、一晩中僕の頭を駆け巡った。

調査ファイル7 きさらぎ食堂の場合

僕は尼寺務。H税務署に勤務している。今日もまた、法人の調査の準備中である。

その法人は「有限会社きさらぎ食堂」。一部の人達には、その途轍もなく強烈な盛りの多さで有名らしい。食事は倒れない程度に採ればいいと考えている僕には、全く無縁の場所だ。

総勢三名で切り盛りしている、ごく小さな食堂である。社長の如月啓一氏、奥さんの純子さん、社長の母親の光恵さん。役員は社長のみで、奥さんとお母さんは従業員扱い。税法上、こういったスタイルの法人は、「過大賞与」などが指摘される事が多い。要するに、社会通念上あり得ない金額のボーナスを、従業員とは名ばかりの家族に支給し、法人税を少なくする方法だ。現在は、法人税率と所得税率の開きが狭まつたため、危険を冒してまでするような裏技ではなくなつて来ているのも事実だが、きさらぎ食堂は、そんな姑息な事はしていない。奥さんもお母さんも、同一業種と比べて、給与も賞与も極端に高い訳ではない。もちろん、多少は多く出しているが、それも許容範囲内だ。指摘して修正してもらうほどではない。

では、何故きさらぎ食堂を調査する事になつたのかと言つと、「密告」なのだ。匿名で、

「きさらぎ食堂は、脱税をしている」

という電話が、地元の新聞社にあつたのだ。それを受けて、そこの記者が我が家に取材に来たのだ。

そうなると、調査に行かざるを得ない。もし、その情報を無視して、その後で本当に脱税が発覚したら、H税務署がマスコミに吊るし上げを食つ事になりかねないからだ。

「何も掴んでいないんですか?」

新聞社の記者は、如何にも情けないという顔で言い放つたそうだ。

「税務署は警察とは違うんです」

取材に対応した統括官もムツとしたらしい。

「でも、客のフリをして様子を調べたりしますよね、税務署さんも？」

映画の「マルサの女」でも観たのだろうか？ 確かにそういう調査はできるが、それで何かわかる事の方が珍しいのを、その記者には理解できないようだ。

「しつかり見届けさせていただきますからね」

最後は、捨てゼリフのような言葉を吐き、記者は帰つたらしく。僕が応対したのではなくて良かつた。

「頼んだぞ、尼寺」

統括官に肩を叩かれ、別の意味でドキッとした僕は、溜息を吐きそうになるのを堪え、署を出た。

きさらぎ食堂の二年分の申告書を調べてみたが、疑わしい箇所はない。社長の経歴もわかる範囲で調査したが、ごく普通の人だ。もちろん、奥さんやお母さんも変わった人ではない。

僕は万全を期すために、反面調査もした。要するに、きさらぎ食堂の取引先を調べるのだ。製粉業者、精肉業者、卸売り専門のスーパー、割り箸などの消耗品を扱う業者も調べた。

むしろ、その業者の方で不正が見つかり、その経営者達は、

「とんだとばつちりだ」

と思つたようだ。無論、僕はきさらぎ食堂の反面調査だとは言つていないので、彼等にはどうして僕が調査に入ったのかまではわからぬ。

「変だなあ」

いくら探しても、きさらぎ食堂が脱税をしている気配を感じる事はできなかつた。

そして、とうとう本丸に乗り込むのだが、何となく結果が見えていて気が重い。何ヶ月か前の、悪夢のよつた連敗地獄が頭の中を過ぎる。

「こんにちは」

僕は、「本日臨時休業」の札が下がっている引き戸を開いて挨拶した。

「今日は休みですよ」

中のテーブルで類杖を突いてテレビを見ていた社長が言った。五十代後半のはずだが、激務なのか、もつと老けて見える。僕は苦笑いして、

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

と身分証を提示した。社長はビクツとして立ち上がり、

「あ、いや、失礼しました。どうぞ、おかげ下さい」

と椅子をテーブルから引き出し、腰に下げていたタオルで拭いた。

「ありがとうございます」

僕は会釈して椅子に腰を下ろす。

「おーい、母ちゃん、税務署の方が見えたぞ」

「はーい」

奥から声が答える。「母ちゃん」とは、どちらだろう? ふとそんな事を考えてしまった。

「税理士の先生は、立ち会わないのですよね?」

一番不思議に思った事を切り出す。普通、納税者は不安だから、必ず税理士に立会いを依頼するものなのだ。何故か如月社長は、それを拒否したらしい。

「ええ。立会い報酬が一日三万円とか言われたので、冗談じゃないと思って、断つたんですよ」

社長は苦笑いして答えた。なるほど、そういう事が。多くの税理士事務所が、一時間当たりいくらで請求する調査立会い報酬は、もつと高額になるケースもあるが、一日三万円は、小さな食堂には負担が大きい。自分達が三万円売り上げるのにどれほど汗を流しているのかを考えると、

「冗談ではない」

と思つのも当然だろう。

「こひつしゃいませ」

お盆にお茶を淹れた茶碗を一つ載せ、奥さんが現れた。なるほど、
「母ちゃん」は奥さんの事か。

「おつかあは？」

社長がお盆から茶碗を持ち上げて、僕に差し出し、自分の分を口
に運びながら尋ねる。

「ありがとう」ぞこます」

僕は熱い茶碗を慌ててテーブルに置き、さつと指を耳たぶに当て
た。

「お義母さんは、まだ起きられな」よ」

奥さんが答えた。社長は僕を見て、

「いやあ、母親が風邪ひきましたね。熱が下がらないんですよ」

「そうですか。ご心配でしょ」

僕がそう言つと、

「鬼の霍乱て奴です。普段は殺しても死なないようなババアなん
ですよ」

社長はこくへり向でも言こ過ぎだれつじこつよつな悪口を言つての
けた。

「聞こえるよ、あんた！」

奥さんが奥に戻りながら窓たしなめる。じつやら嫁姑の関係も良好のよ
うだ。

「聞こえたつていいわ」

社長は全く悪びれる様子もない。いい親子関係なのかも知れない。

「取り敢えず、帳簿類を見せていただけますか」

社長の身上調査は事前にすませてあるので、今日はいきなり帳簿
に取り掛かる事についていた。

「はいはい」

社長がどつこしょと立ち上がり、厨房に消える。それと入れ違
いに奥から奥さんが戻つて来た。

「すみません、お恥ずかしいことこのをお見せして」

「いえ」

僕は只愛想笑いをするだけだ。むしろ微笑ましい光景に思えたのだから。

「はいよ、帳面ね」

社長は厨房から、ラーメンのスープやら、カレーの染みやらがこびり付いた段ボール箱を持って来た。

「この中に一式入っているから、適当に探して下さー。ちょっと仕込みをしたいんで、いいですか？」

「はい」

社長はまた厨房へと消えた。

「全く、せっかちが服着て歩いてるような人なんですよ」

奥さんが溜息混じりに言う。そして、

「私がついていた方がいいですか？」

「ああ、いえ、お義母さんに付き添つてあげて下さい。わからない事があれば、声をかけますので」

「わかりました」

奥さんは会釈して奥へ行つた。こうして僕はガランとした店内に一人になり、帳簿類との格闘を開始した。

さすがに日銭の商売だけあって、現金出納帳の量が半端ではない。一ヶ月だけで三十ページくらいある。これが三年分かと思うとゾッとする。もちろん、調査は明日もあるから、今日で全部見る必要はないのだが、ハイペースでいかないと、他の書類まで手が回らない。日々の売上も多いが、細々とした買い物も多く、スクラップブックにこれでもかとレシートや領収証が貼られている。見落としてしまいそうなくらい、ビツシリと貼り付けられているので、一枚一枚をチェックするのが容易ではない。

「む？」

コンビニでキッチンタオルを買つている。それだけならいい。それに紛れて、タバコも買つっていたのだ。すかさず付箋紙を貼る。

「あれ？」

でもその直後、出納帳の方に、

「タバコ売上」

と同額で入金がある。お客様に頼まれてタバコを買って来たのだろうか？

「ふう」

思わず溜息が出てしまう。

（これは久しぶりに申告是認かな？）

お客様に頼まれたタバコまで帳面を通してているのだ。正直過ぎる。消費税課税業者ではないから、あまり関係はないのだが。これほど細かく現金管理をしているのだ。不正をしているとは思えない。僕はドンドンテンションショーンが下がるのを感じた。

一ヶ月分の現金を追うだけで、一時間くらいかかった。これでは一年分を見るのが精一杯だ。身上調査を事前にしておいて正解だった。

「おや？」

何か不自然な気がする。何だろう？ 具体的に何が、という訳ではないのだが、妙な気分なのだ。もう一度、スクラップブックを見る。でもわからない。何かが変だと思ったのだが、結局わからないまま、その日の調査は終了した。

「また明日来ます」

「お疲れ様でした」

社長と奥さんに見送られ、僕はヘトヘトな身体を引き摺るようにして、きさらぎ食堂を出た。

「あれ、臨時休業じゃないの？」

偶然店の前を通りかかった人に尋ねられた。僕はハツとして、

「あ、いえ、僕はお客様じゃないので」と咄嗟に業者のフリをした。するとその人は、「何だ、そうなの。じゃあ、夜も休みかな」と呟き、立ち去った。

「？」

「どういう意味だ？」「夜も休みかな？」って、何かおかしな日本語だ。僕はすぐさまその人を追いかけた。

「あの、ちょっとといいでですか？」

僕は身分証を見せて、その人を呼び止めた。

「げ、税務署！」

何故か驚愕された。聞いてみると、その人はフリーターで、収入があるにも関わらず、申告をしていないのだとか。

「それはまた後で、別の部署の者がお尋ねしますので」

僕はその人の住所と名前だけ控えた。

「夜も休みかなって、どういう意味ですか？」

僕の質問に、その人は緊張したようだ。別にそこまで恐れなくてもいいと思うんだけど。

「きさらぎ食堂は、一旦閉店してから、夜の部が始まるんですよ」「夜の部？」

まさか、水商売？

「何ですか、それ？」

「大食い選手権です」

大食い選手権？ 何だ、それ？

どうやらきさらぎ食堂は、通常業務の他に、深夜になると「大食い選手権」と銘打つて、

「食べ切れなかつたら、倍返し」

という、賭け事めいた事をしているらしい。それが何かの法に触れるかどうかはわからないが、一旦店を閉めてから、深夜に業務を再開するという情報は貴重だつた。その分の売上は除外されている可能性が高い。あそこまで出納帳を事細かにつけられるのだから、二重帳簿を作っている可能性すらある。

僕は署に戻ると統括官に報告し、深夜きさらぎ食堂に行ってみる事を話した。

「なるほど。それは怪しいな。すまんが、頼む。また明日、結果を

報告してくれ

「はい」

僕は一人暮らしの気楽さもあり、きさらぎ食堂がもう一度開店する午後十一時まで、近くのファミレスで時間を潰す事にした。

「コーヒーのお替り、如何ですか？」

最初は笑顔だったウエイトレスも、僕が夕食の後、何も頼まずに長時間居座っている事に気づくと、一切声をかけて来なくなつた。現金なものだ。まあ、それが商売というものだろうけど。

そして、遂に待ちに待つた午後十一時。僕は精算をすませ、ファミレスを出た。

きさらぎ食堂の近くまで来ると、人だかりができるのに気づいた。さつき店を出た時は、こんなに人間が集まるところには見えなかつたのに、今はまるで「行列のできる名店」のようだ。最後尾を探しながら、店の様子を覗いてみる。

「さあ、次の挑戦者の人！」

女性の声が響く。奥さんじゃない。誰だ？ 不思議に思いながら、最後尾に並ぶ。

「ここはいつもこのくらい混んでるんですか？」

僕は前に並んでいる学生風の男性に尋ねた。

「ええ、そうですよ。初めてなんですか？」

「はい」

するとその学生は得意そうにニヤッとして、

「もつと混雑する時もありますよ。月末は、三倍返しなんです」「三倍返し？」

僕は鸚鵡返しに尋ねた。学生は頷き、

「そうです。負ければ三倍払う事になりますが、勝てば代金が只になつて、三倍戻つて来るんですから、ぼくら学生には、本当にありがたいシステムですよ」

「はあ」

確かにそうかも知れない。僕は食が細い方だから、どんなにお金に困つても挑戦しようとは思わないが、「胃袋」に自信がある人なら、挑戦してみたくなるだろう。

「多分、ビックリすると思いますよ。本当に、馬の餌みたいな量が出て来ますから」

学生はまだいろいろと話していたが、すでに僕は只頷くだけで、まともには聞いていなかった。

しばらく経つて、僕はその学生と共にきさらぎ食堂に入った。時間は十一時を回っていたので、同じ日に一度目の入店とはならなかつたが、僕の姿を見つけた時の社長の仰天ぶりは、本当にカメラに収めたくなるほどだつた。風邪で寝込んでいたはずの社長の母親も、元気そうに動いていた。彼女は僕を見ていないので、どうして自分の息子が僕を見て固まってしまったのか、全くわからなかつたようだ。

そして、きさらぎ食堂の夜の部が終了したのは、深夜二時だつた。母親の光恵さんは、深夜までの営業があるため、日中仮眠をしているのだそうだ。だから、調査に訪れた時、顔を出さなかつたのである。

社長はすぐに觀念した。言い訳もしなかつた。潔いと言えば聞こえがいいが、さすがにジタバタして言い逃れができる状態とは思えなかつたのだろう。表の営業で見せてもらつた、あの几帳面な出納帳は、夜の部でも大活躍しており、詳細に売上げと支払いが記されていた。

「申し訳ありませんでした」

社長は涙こそ流さなかつたが、本当に反省していた。その顔は、ようやく楽になれる、という顔だつた。

昼間は奥さんが切り盛りし、夜は母親が補助する。そして、社長がその細かい性格を存分に生かし、出納帳を作る。これほどの見事な連携を、どうしてもつとうまく生かす方法を考えなかつたのだろう

う？ 脱税をする人達の共通点として、彼等は決して自分達のしている事が発覚するとは想像していないという事が挙げられよう。何件もそういう現場に立ち会つて、それをしみじみ感じた。

僕は翌日、統括官に報告をした。

「どうか。待つた甲斐があつて良かつたな、尼寺」

「はい」

「今日はもう帰つて休め。本当に」「苦労だつた」
統括官の嬉しい一言で、僕は一気に睡魔に襲われた。そしてそのまま署を出て、寮に戻り、泥のように眠つた。

夜になり、そんな僕を起こしてくれたのは、あの着メロだった。

「寝てたの？」

僕の片思いの人である藤村蘭子さんは、例によつて居酒屋への召集をかけて来た。

「うん。昨日は深夜まで仕事だつたんだ」

「そうなの」

藤村さんは、「やめとく？」「と言つてくれたが、僕は召集に応じ、居酒屋に向ついた。

「ホントにお疲れ、尼寺君」

僕が到着した時は、テーブルに生中のジョッキが三つ空になつて並んでいた。

「遅くなつてごめん」

「どうして謝るのよ？ 無理しなくていいのに」

今日の藤村さんは妙に優しい。それが返つて怖いけど。

「尼寺君にかんぱーい！」

「か、乾杯」

僕は下戸だが、藤村さんと飲む時だけは、いつもよりは酒に強くなれる。

「何かさあ、尼寺君が遠くなつて行くなあ

「どうして？」

僕はビールの苦みに顔をしかめて尋ねた。藤村さんは焼酎の空のボトルを、口ロンと寝かせて、

「だって、カツコいいんだもん、尼寺君」

「は？」

また意味が分からぬ事を口走っているよ、藤村さん。

「久しぶりに会った時は、あんなにヘナチヨ」「だつたのことを」
それは言わないで。僕のトラウマなんだから。

「でも、今の方が素敵。好きになつてもいい？」

どんどんエスカレートして行く藤村ワールド。彼女は翌朝、僕と話した記憶が全くないらしいのだ。だから、まともに聞いてはいけない。

「ダメ。僕はまだ仕事に生きるんだから」

最近はどうにか、藤村さんの悪魔の囁きを受け流せるようになつて來た。

「ひどーい。きらーい、尼寺君」

「えつ？」

それでも、マイナス発言をされると狼狽えてしまつ僕だった。

調査ファイル8 藤原鉄工所の場合

僕は尼寺努^{あまでらうとる}。H税務署法人課税部門勤務。彼女なし、片思いの人あり。

その片思いの人に、最近、毎週のように会っている。高校の時の憧れの人だった藤村蘭子さん。ちょっと前までは、税務調査官と税理士事務所担当者としてライバル関係だった。彼女は僕のことなんか、ライバルだなんて思っていないだろうけど。今は只の飲み仲間。いや、「タクシー調達係」と言つた方が正確かな?

藤村さんは、陽気なお酒なんだけど、必ず潰れるまで飲むので、始末が悪いのだ。でも、たまに連絡をとる事がある同級生に訊くと、藤村さんが酔い潰れるまで飲んだのを見た事がないそうだ。

「お前、藤村を何とかしようと思つて、変な酒飲ませてるんじゃないだろ?うな?」

妙な疑惑を持たれた。「冗談じゃない。藤村さんは、全部自分で頬んで飲んでいるんだぞ。大体、酒がほとんど飲めない僕がそんな事できる訳がない。」

「まあ、諦める。藤村は、お前なんかと付き合つたりしないからさ」それは大きなお世話だ。そんな事は考えた事がないし、無理だつて事は自分が一番よくわかつていて。彼女が引く手数多だつたのは、高校の時から知つていた。只、どういう訳か、藤村さんは誰とも付き合つていなかつたのも知つていて。

「あいつ、男が嫌いなのかな?」

同性愛者疑惑まで浮かんだほどだつたのだ。いくら何でも話が飛躍し過ぎだけど。でも、あの久しぶりに再会した建築板金の法人では、

「彼氏と別れたばかり」

と言つていた。だから、彼女は「男が嫌い」という訳ではない。

何でそんな事を気にしているんだろう？ 僕は自分の浅はかさが悲しかつた。

そして今日もまた、ある法人の調査。鉄工所だ。創業六十年で、戦後間もない頃から営業している。社長は二代目で、先代以上の切れ者という噂だ。株式会社藤原鉄工所。高層ビルから、橋げた、野球場のバックネットまで請け負う。社長の藤原理一郎氏は、六十代とは思えないくらいの若々しさで、まだ三代目に後を継がせる気がないらしい。

担当の税理士事務所に連絡する段になつて、僕はギョッとした。

「二、近藤税理士事務所？」

そこは、藤村さんがいるところ。でも、前回は実相寺税理士事務所にいたから、彼女が担当という事はないだろうと思い、受話器を取つた。

「近藤税理士事務所です」

若い女の子が出た。藤村さんではない。

「私、H税務署法人課税部門の尼寺と申します」

「お世話になります」

爽やかな声でそう言われる。僕はドギマギしてしまい、

「あ、あの、お世話になります」

と慌てて答えた。そして、

「近藤先生の顧問先であります、藤原鉄工所さんの税務調査の件でご連絡いたしました。担当の方はいらっしゃいますか？」

「担当の錦織^{にしきおり}は只今外出中ですので、折り返しご連絡致します」

その子の受け答えはとても素敵だった。僕は電話を切る時に名前を聞き出そうと思つて誘導してみた。

「あの、私、法人課税部門の尼寺と sagt いますが？」

「私、藤村と申します」

「え？」

僕はビックリした。藤村さん？ でも、声が違う。もしかして、

声色を使って僕をからかっているのか？ でも、出た時からこの声だ。からかうなんて事ができる状況ではない。

「では、よろしくお願ひします」

僕は疑問を払拭できないまま、受話器を置いた。

しばらくして、担当の錦織さんから電話が入った。男だと思つていたが、アニメ声の若い女の子だった。でも、近藤先生のところは教育が行き届いているようで、とても受け答えが鮮やかだ。こちらの提示通り、調査は再来週の水木で行う事になつた。錦織さんは予め先方に連絡して予定を訊き、税務署にかけて来たのだ。実に効率のいい対処の仕方だ。素晴らしい。僕が新人の頃、そこまでできていたらうか？ 軽く凹む。まあ、錦織さんが新人かどうかはわからないけど。税務署の先輩女子にも、アニメ声の人いるしなあ。

そして調査当日。僕はちよつとだけドキドキしながら、藤原鉄工所に赴いた。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

僕は事務所のドアを開いて顔を出した女性に身分証を提示した。

「お待ちしておりました。近藤税理士事務所の錦織です」

若い女性だ。この人が錦織さん？ まだ、学校に行つてそうな顔をしているけど。おっと、こんな考え方は女性蔑視だつて、この前藤村さんに言われたつけ。それにしても、とても可愛い顔と声だな。

「社長の藤原です」

ドアを閉じて振り返ると、錦織さんの隣に立つている男性が名刺を差し出して言つた。この人が社長？ 六十代のはずなのに、どう見てもそんな歳には見えない。肌のツヤが良くて、見よぎによつては四十年代だ。

「よろしくお願ひします」

僕はソファに案内され、腰を下ろした。反対側に錦織さんと藤原社長が並んで座る。

「まずは、お茶をどうぞ」

社長の奥さんだらう、僕に来客用と一皿でわかる茶碗でお茶を出してくれた。

「ありがとうござります」

僕は会釈した。「うん？ 何か、錦織さんがジッと僕を見ている気がするが？ 自意識過剰かな？」

「ではまず、社長の身上調査をさせていただきますね」

「はい、どうぞ」

藤原社長は、堂々としている。この法人は、社長が全部仕切っているようだ。奥さんも経理の深い部分はタッチしていない。どうやら今回は、「申告是認（不正や誤りが認められない事）」の雰囲気だ。人は見た目で全部わかる訳ではないが、藤原社長は悪い事をしているようなタイプには見えない。そして、事務所の中も奇麗に片づけられており、工場も整理整頓が行き届いている。何か出るとすれば、ケアレスミスのような類いだらうが、藤村さんがいた近藤税理士事務所では、それもあり得ない。

午前中は身上調査と雑談で終わり、僕は昼食をとるために事務所を出た。

「尼寺さん」

何故か錦織さんが追いかけてきた。

「何でしちゃうか？」

昼食に出るだけだから、忘れ物を届けてくれた訳でもない。僕は不思議に思つて、錦織さんを見た。

「お昼」一緒していいですか？」

「え？」

どうして？ 何でそういう展開になるの？

「え、いや、でも、税務署の調査官と、税理士事務所の担当者が一人で食事は、まずいですよ」

僕は可愛い女の子の申し出は嬉しかったけど、そこは心を鬼にしてそう言った。

「でも藤村先輩とは、一緒に食事しましたよね？」

ギク。どうしてそんな事を知ってるの？ 嫌な事を思い出してしまった。

「やつぱり、藤村先輩と尼寺さんて、付き合っているんですね」「付き合つてませんよ」

「そりですかあ？」

「ど」をどう押せばそんな推理が成立するのか、と思つて、「、錦織さんの言動は飛躍している気がする。

「だったら、いいですよね、『』一緒にして」

「は、はい」

これ以上妙な事を言われるのと、税理士事務所の担当者と昼食をとつたのを知られるのを秤にかけ、僕は「『』一緒に」を選択したのだった。

よく喋る。その一言に呑きる。

錦織さんは、藤村さんの直属の部下だつたそつだ。だから、会計監査の仕方や、税務署や顧問先とのやり取り、そして電話の応対に至るまで、藤村さん直伝なのだそつだ。そんな話から、藤村さんが酒癖が悪い事、酔うと必ず僕の悪口を言つ事、更には自分の彼氏が最近会つてくれない事まで、まるでショットコースター並みのスピードで捲くし立てられた。

顔と声が可愛い子だなどといつてやつた出来事はどこかに吹つ飛んでしまつほど、錦織さんはパワフルだった。藤村さん一世。いや、ある意味彼女より凄いかも知れない。

「ありがとうございました」

何故か僕は錦織さんに『』馳走した形になつていた。これは問題かも知れないが、今更彼女に、

「割り勘で」

とは言ひにへい。ああ、藤村さんの方が何倍もやり易いよ。

そして、調査午後の部。売上関係からチェックする。請求書、契約書、見積書、納品書、領収証。それぞれを見比べながら、メモを取る。社長と奥さんはゆつたりと構えていて、全く動じる様子がないが、錦織さんは忙せわしなく動き、僕の顔を見たり、僕のメモを覗き込んだり、自分のノートに何か書き込んだりしていた。

(何を見ているんだろう?)

僕は錦織さんの行動が気になつたが、自分の仕事に集中した。売上には、何も引っかかる事はなかつた。錦織さんはそれでもノートに何か書き込んでいた。

そして次は仕入と外注費のチェック。請求書、納品書、発注書、契約書。ちょっとだけ気になるのは、手書きの請求書が多い事だ。よく見ると、外注は個人事業主が多い。所謂「一人親方」というスタイルだ。

「外注さんの出面帳は、藤原さんで管理しているのですか?」

出面帳とは、仕事をした人達の動きを把握するための表だ。どこの現場に何人という具合に記して行く。

「はい。『ごらんになりますか?』

社長が立ち上がる。

「お願いします」

社長が奥さんを見る。奥さんはサッと動き、大きな出面帳を持って来た。

「はい、こちらです」

「ありがとうございます」

僕はそれを受け取り、吟味した。特に問題はなさそうだ。取越苦労かな? 手書きの請求書を怪しんでしまつのは、一種の職業病かも知れない。

結局、そこまでで第一日は終了した。僕は社長達に挨拶して事務所を出た。

(申告是認か)

溜息が出る。別に「申告是認」は税務署の敗北という訳ではない。しかし、もし万が一、本当は何か不正があるのにそれに気がつかずに見逃したとしたら、それはまさしく由々しき事態なのだ。

（今回はそれはないな）

藤原社長と奥さんの人柄を見る限り、そんな心配は必要ないと思えた。

「尼寺さん」

僕は本当に飛び上がりそうなくらい驚いた。

「失礼ですよ、それって。女の子が声をかけたのに、ビクッとするなんて」

ゆつくつと振り返る。すると、錦織さんが一瞬一瞬して立つている。

「な、何かご用ですか？」

僕はつい後ずさりして尋ねた。錦織さんは、

「残念でしたね。多分、何も出ないと思いますよ」

「はあ」

そんな事をわざわざ言つてに来たのか？ 藤村さんはより性格悪いな。もし何か出たら、私が今日のお礼に「馳走しちゃいますか？」

「へ？」

何て事言つて出すんだ、この子は？ それまでバカにやれると、怒る気にもならない。

「そうですか。精々（せいぜい）頑張つてみますよ」

「そうして下さい」

錦織さんはそれだけ言つと、

「じゃあ」

と駆けて行つてしまつた。駆け方もアニメみたいだと思つるのは偏見だろうか？ ほんの一瞬、

「夕食（ゆふくし）一緒しませんか？」

と言われるのを期待した僕がバカだった。

「つづつー。」

あんなガキに！ そう思つと、急に闘志が湧いて來た。

そして翌日。何も見つからぬまま、午後の部だ。得意満面な錦織さんが僕を見つける。トラウマが甦る。あの時の藤村さんの顔が……。

「あれ？」

僕はその時、思わぬ事に気づいた。給料だ。そうか、それを見ていなかつたぞ！ 僕は提出された申告書を鞄から取り出し、別表二（同族会社の判定に関する明細書）を見た。

「どうしたんですか？」

不安になつたのか、錦織さんが立ち上がりて覗き込む。しかし、社長は悠然としたままだ。僕は顔を上げて社長を見た。

「奥さんが、みなし役員に該当しますね」

みなし役員とは、以下ののような条件を満たす者の事を言つ。

- ？ 経営に従事している
- ？ 持株割合
- イ・自分の属する株主グループが上位3位以内で50%超所有していること。
- ロ・自分の属する株主グループが10%超保有していること。
- ハ・自分（配偶者を含む）が5%超保有していること。

つまりは、多くの中小法人の場合、株主であり経営者である社長の奥さんは「みなし役員」に該当してしまうのだ。もちろん全部がそういう事ではないが。

「奥さんの給与自体は、特に高額でもなく、社会通念上許される範囲だと思われますが、賞与に関しては、損金算入できません」

「損金に算入できないというのは、『経費で落とせない』という意味だ。」

「そ、そんな、あの……」

錦織さんのあの得意顔が崩壊していた。彼女はパニク寸前で、目が泳いでしまっている。

僕は土壇場で逆転勝利した。いや、調査は勝負ではないけど。社長と奥さんにみなし役員の説明をし、損金に算入された奥さんの賞「J」を損金不算入とした場合の計算をメモにして、手渡した。

「そうですか、わかりました」

納得してくれたのか、それとも理解できていないのかわからないが、社長はまだ動じた様子がない。

僕はその社長の態度が気になつたが、別に問題にする事でもないので、また後日連絡する事を告げ、事務所を出た。

「尼寺ちゃん」

また錦織さんが追いかけて来た。でも今回は泣きべそをかいている。

「昨日の事なんすけど」

「ああ、いいですよ、気にしてませんから」

僕は彼女に奢つてもらつてしまはない。食事に行くのは、やがて吝かではないけど。

「ち、違つたです。ホントに失礼な事を言つてごめんなさい」

「ああ」

何だ、いい子じゃないか。僕は錦織さんに好感を持った。「自分が自惚れていたのがよくわかりました」

「そうですか」

僕は、錦織さんが泣き出すのだけは勘弁して欲しいと思つていたが、どうやらその心配はなさそうだ。

「勉強させていただきました。ありがとうございました！」

彼女は深々と頭を下げ、ダツと駆け出した。頑張つてね。そんな思いで、彼女を見送る。

そして。僕はとんでもない真実をその日の夜知る事になる。

「尼寺あ」

藤村さん、いきなり絡み酒。いつもの居酒屋だ。今日は錦織さんも同席。少しホッとしている。

「な、何、藤村さん？」

僕は目が座っている藤村さんを見て尋ねる。藤村さんは、

「あんた、ニッキにチョッカイ出さないでよね

「は？」

「ニッキ？ 少年隊のメンバーの愛称か。古いの知ってるな。

「嫌だなあ、先輩。私、尼寺さんを取つたりしませんてば」

酔いが回っているのは、錦織さんも一緒にらしい。

「何言つてんのよ、ニッキ！ 尼寺君は、私の彼氏でも何でもないの！ 只のお友達！」

良かった。「お友達」か。召使と言われるかと思った。

「そうそう、尼寺さん」

錦織さんが、妙に嬉しそうだ。

「どうしました？」

僕は彼女を見た。すると錦織さんは、

「今日の調査、私は負けてませんから」

いや、だから、調査は勝負じゃないから。え？ どうこう意味？

「みなし役員賞与、社長のお土産なんですよ」

「え？」

僕は意味がわからず、藤村さんを見た。すると藤村さんは、コロコロと焼酎のビンを転がして、

「奥さんの賞与が損金不算入になるのは、わかっていたって事よ。あの社長、いつも税務署にお土産を用意しているの」

「ええ？」

「という事は、あれは故意にそうしてあつたのか？ でも、何のために？」

「それが税務署との良好関係を築くんですって。昔の人の考え方そんな事よ」

藤村さんは、藤原社長の行為があまり面白くないらしい。僕もそ

うだ。税務調査は、そういうものではないはずだ。「持ちつ、持たれつ」の考えは間違っている。

「なんだ

「うなんだ

今日は悪酔いしたい気分だった。

やがて、錦織さんは彼氏からのメールが入り、帰ってしまった。

「尼寺君」

「何?」

二人きりになると、ビクビクしてしまつ。

「ニッキは彼氏いるからね」

「わかつてゐよ

僕はもしかして、などと不届きな事を考へる。藤村さん、ヤキモ

チ?まさかね。

「でも、私はいないから

「え?」

またそういう事を言つて酔い潰れる藤村さん。ホントに「小悪魔」だよなあ。

調査ファイル9 石動建設の場合

僕は尼寺務。^{あまでらうど} H税務署の調査官だ。

最近、ようやく仕事にも慣れて来て、調査対象である法人に行つても、只間違いを指摘するだけではなく、フォローも入れる余裕が持てるようになった。そこまで上がれたのは、言うまでもなく、上司である統括官や、先輩の方々の指導と助言があつたからだ。本当に感謝している。

でも、それ以上に感謝している人がいる。藤村蘭子さん。高校の同級生で、片思いをしていた人。その人に調査で出会わなければ、僕はきっと前にこの仕事を辞めていただろう。彼女には、トラウマになりそうな思いもさせられたけど、「この仕事を続けたい」と思わせててくれた。

今、彼女は税理士事務所が変わってしまい、残念な事にH税務署の管轄の法人を担当していない。

あ。僕は何を期待しているのだろう? 藤村さんとは、あくまで飲み仲間。悪くすれば、「タクシー調達係」でしかないのに。

そんなある日、僕は提出された申告書をチェックしていく、ふと目を留めた。

「石動建設?^{いすうけき}」

その名前は、見覚えがあつた。高校の同級生。そして、僕を苛めていた男。更に、藤村さんと付き合っていると噂だった男。結局、後で知つた事だが、石動は藤村さんとは付き合つていなかつたそうだ。

久しぶりに再会したあの板金屋の調査の時、別れたのかと思つたけど、付き合つてもいなかつたと知つてホッとしたのを思い出した。

「住所も同じだ。間違いない。あいつのところだ」

申告書の別表一(同族会社の判定に関する明細書)を見る。「石^{いす}

るき

動幸喜^{じゅうこうき}。あいつの名前だ。更に資料を当たり、登記内容を確認する。石動は、取締役になつてゐる。

「そつか

僕は別に石動には何も怨みは引き摺つていない。

「げ

驚いたことに、有限会社石動建設の顧問税理士は、近藤力先生^{じんとうぢかせん}だつた。

「誰が担当しているんだろう?」

あのアニメ声の錦織さんだらうか? あまり会いたくないな。ハツとする。僕はすでに、石動建設に調査に行くつもりでいた。(何を考えているんだ、全く)

今の状態で行けば、まるで私怨を晴らしに行くよつなものだ。

「どうした、尼寺?」

先輩が僕の様子を変に思つたのか、声をかけてくれた。

「あ、いえ、別に何でもありません」

「おお、それ、石動建設の申告書か?」

先輩は興味深そうな顔で覗き込む。

「はい。それが何か?」

僕は不思議に思つて先輩を見上げた。

「俺が今調査中の法人がさ、石動建設に巨額な貸付金をしていてさ。どうも、所得隠しじゃないかと思うんだ」

「所得隠し、ですか?」

ギヨッとした。石動がそんな事に巻き込まれてゐるのか?

「その法人の決算は三月なんだ。石動建設の決算は一月だから、その申告書には計上されていないけど、そんな妙な事が行われてゐるのは、間違いない

「そうですか」

僕はもう一度申告書を見た。

「尼寺、そここの調査に行くのなら、貸付金の事を調べてくれ。もしかすると、とんでもない脱税事件になるかも知れないからな」

「はい」

もう僕は後戻りできなくなってしまった。でも、石動、僕を覚えているだろうか？

そして僕は、統括官とも相談の上、石動建設の調査に行く事にした。

「私情は禁物だぞ、尼寺」

「はい」

統括官の指摘は当然だ。僕は石動が高校の同級生だといつ事を話した。違う人に交代させられるかと思ったが、

「その方がいい場合もある

と統括官は僕に調査をするように言った。

早速、顧問税理士である近藤先生の事務所に連絡をする。
「お電話ありがとうございます、近藤税理士事務所です」

この前聞いた声の女の子が出た。確か藤村さんだ。妹さんだろうか？ でも彼女に妹がいるなんて聞いた事ないな……。いや、僕は彼女の事を全部知っている訳じゃないし。

「私、H税務署法人課税部門の尼寺と申します」

「いつもお世話になつております」

女の子は濶みなく話す。僕は、

「こちらこそ、先生にはお世話になつております」と返し、本題に入る。

「実は、近藤先生の顧問先である石動建設さんの税務調査にお伺いしたいのですが、担当の方はいらっしゃいますか？」

「担当は只今外出中ですので、折り返しお電話させます」

受け答えは完璧だ。やっぱり妹さんだろうか？ また誘い水を向けてみる。

「ありがとうございます。私、尼寺と申しますが？」

「私は辻村と申します」

「あ、何だ。辻村さんか。電話だと聞き間違えるな。

「よろしくお願ひします」

僕は思わず苦笑いをして受話器を置いた。

(藤村さんの事ばかり考えているからだよ)
違う自分が奢める。 そつかも知れない。

しばらく資料整理や報告書作成をしていると、近藤税理士事務所の担当者から連絡が入った。

「お電話代わりました、尼寺です」

何故か沈黙。 そして、笑い声が聞こえる。 どうこうつ事だ?

「ああ、失礼しました。 私、石動建設さんの担当をしております、東山と申します」

え? 何だったの、今の笑い声? それにしても、錦織さんではなくて、東山さんか。 あと、植草さんで少年隊が結成できるな。 「石動建設さんの調査の件なのですが……」

僕は気を取り直して話を続けた。 東山さんも錦織さんと同じで、すでに先方に確認済みらしく、日程は再来週の水木で決まった。

「では、失礼致します」

僕は受話器を置いた。 それにしても、気になる。 どうして彼女は笑っていたのだろう? まあ、いいか。 僕は頭を切り替えようと、もう一度資料に目を通した。

そして、調査の日。 僕は石動建設の事務所の前にいた。

(こんなに大きな会社だったのか。 知らなかつた)

三年前に土地を買い増しし、自社ビルを建てたようだ。 この不景気に、随分と勢いがある。

それは決算書にも現れている。 連続增收増益で、右肩上がり。 受注内容を大きく変換したのが当たつたという噂だ。 僕は事務所のドアの前に立ち、ドアフォンを押した。

「おう、やつと来たな、尼寺」

こきなりドアが開き、高校の頃と少しも変わらない陰険そうな顔

で、石動が出て来た。但し、口ひげを生やし、嫌らしさが増していったが。

「や、やあ」

まさか僕の事を覚えていとは思わなかつたので、すっかり面食らつてしまい、そんな挨拶しかできなかつた。

「まあ、座つてくれ。いろいろ話したい事があるんだ」

妙にテンションが高い石動。僕はよつやく自分を取り戻し、「H税務署法人課税部門の尼寺です」

と身分証を提示した。何か間抜けだ。

「わかつてゐつて。税理士さんからみんな聞いてるよ」

石動はそう言つて、事務所の奥にあるソファに座つている女性を見た。あの人が東山さん?

「お世話になります、私、近藤税理士事務所の東山です」

東山さんは僕に近づいて来て、名刺を差し出した。錦織さんとは違い、アニメ声ではない。清楚な感じのするお嬢様タイプだ。長い髪、デザイン性の高い眼鏡。できる女性を印象付ける。藤村さんの「愛弟子」だろうか? 名刺を見ると、「東山美奈」と書かれている。

「ほらほら、サッサと座れよ」

「は、はい」

僕はハツと我に返り、ソファに腰を下ろす。向かいに東山さんと石動が座る。

「美奈ちゃんに聞いたよ。蘭子と付き合つてゐんだって?」「は?」

美奈ちゃん? 税理士事務所の担当者をちゃん付け? しかも、藤村さんを呼び捨て?

「高校の時と違つて、随分と積極的になつたなあ、お前」事務所を見回すと、僕ら以外に誰もいない。社長はどうしたのだろ?」

「あ、いや、藤村さんとは付き合つていないですよ」

「だつて、毎週飲みに行つてるんだろ?」

高校の頃の石動を思い出してしまつた。こいつはこんな風に僕を言葉で追い詰め、苛めていた。

「いえ、飲みには行つてますけど、付き合つてはいません」

「妙な事言つなあ。ねえ、美奈ちゃん?」

「ここはキャバクラか? そう思いそうになつた。キャバクラに行つた事はないけど。石動は腕を東山さんの後ろに回していた。触れてはいけないが、まるで肩を抱いているように見える。

「あの、今日はそういう話をしに来たのではないので、帳簿類を見せていただけますか?」

「わかつたよ。相変わらず、融通が利かない奴だな、お前」

石動は東山さんを見て、

「美奈ちゃん、出してあげてよ」

「はい」

東山さんは、慣れているのか、嫌な顔もせずに立ち上がり、隅に置かれた段ボール箱を運んで来る。辛そうだ。

「ああ、僕が運びますよ」

「すみません」

僕は東山さんから段ボール箱を受け取つた。

「明日も来るんだっけ?」

石動が唐突に訊く。

「はい。調査は一日間の予定ですから」

「それなんだっけ? 俺、用事があつても、調査、今日だけにしてくれない?」

「え?」

今までたくさんの方人に調査に行つたが、調査日当日に予定変更を申し入れられた事はない。

「頼むよ。今度の女は、大本命でさ。明日、どうしても落としたいんだよ」

「何だ? 好きな女と会いたいから、調査を今日だけにしろだと?」

何を思い上がりっているんだ、ここには？ 昔からそういう奴だつたけど。よし、それならそれでいい。僕も作戦変更だ。

「わかりました。いいですよ」

「おお、やつたあ！ ありがとな、尼寺。やつぱ、持つべき者は友達だなあ」

僕は啞然とした。お前なんか、友達じゃないよ。心の中でそう呟いた。

そして僕は通常の三倍、とは行かなかつたが、とにかく大急ぎで帳簿をチェックした。どうやら、石動は、税金対策で役員になつてゐるだけで、仕事はしていないうつだ。報酬も控え目なので、問題にするほどではない。

（でも……）

おかしい。こいつが、年収三百万円で、役員になるだらうか？

そんな奴ではない。

「石動さん、今年度の出納帳を見せていただけますか？」

僕は賭けに出た。これで何も見つからなければ、この調査は明らかに失敗だ。

「待つて下さい。申告期限が経過していない事業年度の帳簿は、お見せする必要はないはずです」

さすが、東山さん。それを知つていたか。ピンチだ。

「いいよ、美奈ちゃん。ここで頑張つても、来年また来られれば、バレるんだから」

「え？」

東山さんは石動の言葉に呆然としていた。それはそうだろう。義務のない事を調査官が言つてゐるのを阻止しようとしたのに、それを遮つたのだから。

「さあ、見てくれ、尼寺。俺の会社の悪行を、全部見つけ出してくれ

「専務、それはどういう事ですか？」

東山さんは訳がわからないらしく、酷く慌てていた。

「いいんだよ、美奈ちゃん。君の所には迷惑をかけないから」

石動の顔は、来た時と違い、とても清々しくなっていた。どうい

う事だろ？ 僕も困惑した。

石動は調査の連絡を社長である父親に告げず、旅行を計画して、社員を皆出かけさせてしまったのだという。彼は父親の悪事を快く思わず、調査があると知った時、それを一切合財出してしまおうと思つたようだ。

昔の石動と全然違つていた。何があつたのだろう？

「何も知らないでのうのうと生きて来たのを、この会社の役員になつて知つたんだよ」

彼は自嘲気味に言つた。

「俺はこんな汚い金で育てられていたのかと思つと、本当に腹が立つた。親父が許せなかつたんだ」

「……」

僕は何も言えなかつた。

「尼寺、遠慮は要らない。全部曝け出しちまつてくれ。親父に全うに生きる事を教えてやつてくれ」

「わかつた」

僕は証拠となる書類を預かると、事務所を出た。

「尼寺」

石動が追いかけて来て、ドアのところで声をかけた。

「あの頃の事、許してくれ。俺は本当にバカだつた」

「いや、別に僕は何とも思つていなか」

僕は心の底からそう言つた。石動は嬉しそうに微笑み、

「たまには同窓会にも顔出せよ」

「そうだね」

僕は会釈をして、歩き出す。

「蘭子とつまくやれよ！」

「だから、藤村さんはそういう関係じゃないって！」
蒸し返さないで欲しい。結構いい気分だつたんだから。

僕が石動に託された書類は、驚愕の物だつた。石動建設ばかりでなく、付近一帯の土建業界が吹き飛ぶのではないかという、とんでもない談合の証拠だつたのだ。先輩が調べていた法人の、石動建設への貸付金は、その談合で生じた裏金だつた。

石動の会社はどうなつてしまふのだろう？ 僕は後味が悪い思いをした。

「フーン。石動君ねえ」

いつもの居酒屋。そして、いつもの藤村さん。今日は豪華な事に、錦織さんと東山さんもいて、「三人官女」だ。

「キヤハハ、やつぱりお一人は付き合つてるんですね？」

飲むと豹変するタイプ。東山さんの変貌振りには驚いた。

「そうだよ、美奈ちゃん。知らなかつたのぉ？」

錦織さんも酔っ払つている。

「つるさい、二人共！」

藤村さんの一声で、二人は正座し、黙り込む。凄い。

「そつなんだあ。ひげ生やしてたのかあ」

藤村さんには、調査の内容は話せないので、石動の近況報告だけした。多分藤村さんは、東山さんから全貌を聞いているだらうけど。「うん」

「何か言つてた、石動君？」

トロンとした目で藤村さんが尋ねる。僕はギクッとした。すると東山さんが陽気に笑い出し、

「はい、言つてましたよお。確かあ、『蘭子とうまくやれよー』って言つてました」

何て事を！ あれ？ 藤村さん、寝てた。早い。

いくら呼びかけても起きない藤村さん。東山さんと錦織さんは、彼からのメールで帰つて行つた。また一人きりになつてしまつた。

「またか」

溜息が出る。タクシー呼んでもらつて、行き先を告げて……。などと考えていたら、

「うん?」

珍しく、藤村さんが目を覚ました。

「良かった、今田は自分で帰れそうだね」

僕はホッとして言つた。すると藤村さんは、

「じめん、尼寺君。いつもタクシー呼んでもらつて。それも、お金まで……」

彼女にそんな事を言われると、とても照れ臭い。

「仕方ないよ。藤村さん、寝たら起きないんだもん」

僕は藤村さんを宥めるつもりでそう言つた。ところが、

「私が寝ている間に変な事してないわよね?」

と思わぬ反応が返つて來た。

「えつ!?

僕は仰天してしまつた。藤村さんの目が、疑惑に満ちて行く。そんなあ。

「そ、そんな事する度胸、僕にある訳ないじゃないか……」

僕はやつとそれだけ言つ事ができた。

「そんな事ができるくらいなら、とっくに告白してるよ……」

パニックも手伝つたのか、とんでもない事まで口にした。ハッとして彼女を見るが、聞こえなかつたのか、何か咳いている。

「ラストオーダーです」

店員が來たので、僕は、

「お勘定」

と声をかけた。

「えつ? 今何か言つた?」

藤村さんが話しかけた氣がして振り向く。

「ううん、何でもない」

そう言つと、藤村さんは立ち上がつた。

「カラオケでも行こうか、尼寺君」

「えっ？ 僕、もうお金あまり持っていないよ

ビクッとして身を退く。彼女はニッとして、

「大丈夫。お姉さんに任せなさい」

と胸を張つた。確かに生まれ月では藤村さんの方がお姉さんかも知
れないけど。

そして結局、二時間歌い捲つた藤村さんは、がぶ飲みしたカクテ
ルと疲れのせいで眠つてしまつた。

「あーあ」

今日はタクシー係はいらなかつたと思つた僕が甘かつた。

調査ファイル10 菅物産の場合

僕は尼寺^{あまでらうじ}務^む。H税務署勤務の税務調査官だ。入所三年目を迎え、ようやく仕事にも慣れて来た。

僕はいつものように出勤して、机の上に書類を広げ、次の予定を確認しようとした。

「尼寺、ちょっとといいか？」

上司である統括官が僕を呼ぶ。ドキッとする。いろいろな事が頭に浮かび、眩暈がして来そうだ。

「な、何でしようか？」

僕は鼓動が統括官に聞こえるのではないかと恐れながら、近づいた。

「そんなに私が怖いのか、尼寺？」

「え、いや、そうではありません」

統括官がニヤリとして言つたまは、まさにあの憧れの女性である藤村蘭子さんがダブル。

高校の同級生にして、調査官として完膚なきまでに叩きのめされた人。でも、僕にこの仕事を続けようと決意させてくれた人でもある。今は、本当に自分が彼女の事を女性として好きなのだと実感している程だ。

「実は、異動の話が来ているんだが」

統括官の言葉がずっと遠くで聞こえているような気がした。

異動？ 異動？ 「いどう」と言つても、席が変わるのでない事くらいは理解している。

「ど、どこにですか？」

僕はそこがどこであるかと受け取つつもりでいた。そして、それをきっかけに、藤村さんに告白するつもりだ。そんな劇的な事でもなければ、「優柔不断が息をしている」と揶揄された僕は、決断する

事ができない。

「N税務署だよ」

「は？」

僕は「これはコントだらうかと思つた。N税務署はこここの隣の管轄の税務署だ。異動なんていう大袈裟な事ではない。

「そんなに驚くな、尼寺。これは正式な辞令ではない。N税務署の職員のご両親が亡くなつてな。悪い事に、その職員は三人兄弟でN税務署勤務で、どうしても予定が捌き切れなくなつてしまつたんだ」

「どうい事は？」

僕は恐る恐る言つてみた。統括官はまたニヤリとして、

「緊急的な措置だ。明日から、N税務署に応援に行つてくれ。これは、あちらからの指名なんだよ」

「え？ 自分は指名されたのですか？」

ビックリした。どうい事だらう？

「理由は聞いていない。まあ、他所で仕事をするのもいい経験だ。行つてくれるな？」

「はい」

喜び半分、悲しさ半分だ。遠くに行くのではなかつた事は嬉しかつたが、これでは藤村さんに告白するきっかけにはできそうもない。それは僕が情けないだけなのだが。

僕はその日は雑用に追われ、仕事はほとんどできなかつた。行く予定だつた法人の調査先を先輩に引き継ぎ、その日は終わつた。

そして翌日、僕は隣の市にあるN税務署に行つた。

「申し訳ないね、山寺君」

法人課税部門の統括官が出迎えてくれた。その人は、H税務署の統括官の同期らしい。

「H税務署から来ました、尼寺務です。よろしくお願ひします」

「あまでら」を強調して言つた。しかし無駄だった。

「みんな、紹介しよう。H税務署の敏腕調査官の山寺君だ」とあつさり言われた。もうどうでもいい。

「よろしくな、山寺君」

もうH税務署では、「山寺」でいい。観念した。

「早速で悪いのだが、調査に行って欲しい」というがある

「はい」

ここに長時間いて、「山寺」を連呼されるくらいなら、法人調査に行つた方がマシだ。

「まず、今日はここに行つてくれたまえ」

「はい。自分一人ですか?」

僕は資料に目を通しながら尋ねた。

「もちろんだよ。君の良く知つてている税理士の顧問先だからね」「は?」

僕はその言葉にギクッとなり、もう一度資料を見た。

(実相寺沙織税理士事務所?)

驚愕のシナリオだ。こんなオチだとは思いもしなかつた。藤村さんがいる事務所だ。確かに以前聞いた話では、職員は一人で、監査担当は藤村さんだけのはず。久しぶりに「現場で血が流れる」予感がして來た。よく考えてみたら、実相寺税理士事務所の住所は、N市だった。

「その事務所の監査担当の女の子は、以前H税務署管内の近藤税理士事務所にいたそうじゃないか。君も何度か調査で顔を合わせているだろ?」「は?」

もしかして、そのせいで僕は指名されたのか? 頭痛がして來た。

「軽くひねつて上げてくれ、山寺君」

統括官は、ニコニコして言つ。ああ、何て事だ。軽くひねられた、僕はどうなつてしまつたのだろう? どうやら、僕が藤村さんに「軽くひねられた」情報は入つていないようだ。凄いプレッシャーを感じる。

「は、はい」

それでも、公務員の僕は、仕事をしなければならない。もしかすると、今日が僕の公務員生活最後の日になるかも、などと考えてしまつた。

今まで何度も嫌な調査は経験して来たが、今日ほど嫌な調査はない。僕は思い足取りで、調査先の法人である「有限会社 菅物産」に赴いた。

そこは、食品卸を主な業務としている、流通会社だ。規模はそう大きくはない。大手の商社の一部を請け負つて、問屋から小売店に運んでいる。メインは輸送になる。

「ごめん下さい。N税務署の者ですが」とインターフォンに言った。

「どうぞ、お入り下さい」

「はい」

誰もドアを開けに来てくれる事なく、僕は自分でドアノブを開け、中に入った。

「書類はそこにありますから、どうぞ」自由にご覧下さい「事務員らしき中年の女性がツッケンドンに言った。あれ？ 税理士事務所の人がいない。どういう事だ？」

「あの、税理士事務所の方はいらっしゃらないのですか？」

僕は恐る恐る事務の女性に尋ねた。

「いませんよ。調査立会い報酬は、顧問料とは別ですって言われて、社長が立会いを断つたんですよ」

「え？」

驚いた。そんな法人なんて聞いた事がない。何を考えているのだろうか？

「ですから、お好きなように。私も、帳簿の事はわかりませんから、何も訊かないで下さいね」

「どういう事ですか？」

無責任な発言なので、僕は力チンと来て語氣を強めて尋ねた。

「私だつて、いきなり留守番頼まれたんですよ！　今日だけここでの事務員なんです。そんな事言われたつて、どうしようもないです！」女性に逆ギレされてしまった。

「一体この法人は、どうなつているのだろう？　僕は呆れ返つてしまつた。それでも調査をしない訳にはいかない。応接セットのテーブルの上に乱雑に出された書類の山に近づき、ソファに腰を下ろす。

「はあ

僕は溜息を吐き、調査を開始した。

そして帰署時間が近づく。

顧問税理士の立会いを拒むような法人だけあつて、とにかく帳簿は出鱈目だつた。藤村さんの懐かしい字が書き込まれた付箋紙がたくさん貼り付けられたままだ。実相寺税理士事務所の名入りの封筒がたくさん紛れ込んでいる。皆封を開けてあつたので、中身を確認すると、それは、

「帳簿の内容には当事務所は一切の責任を持ちません」

とこうの内容だつた。つまり、匙を投げられた訳だ。指摘された事を全く改善・訂正する事がなかつたのだろう。藤村さんは、調査立会いを拒否してくれてホッとしているかも知れない。

「今度は、社長がいらっしゃる時に来ます。また連絡しますので、お伝え下さい」

僕は帰り際にそう言つたが、女性は、

「私にそんな事言わないで下さい。ここで貴方が来るのを待つて、貴方が帰るまでいてくれと頼まれただけなんですから」

「……」

経営者が経営者なら、留守番も留守番だ。僕は彼女には何も言わず、

「失礼します」

と会社を出た。

僕は帰署し、統括官に報告した。

「そうか。そんなに酷いところだったのか」

「はい。あれでは、税理士の先生が可哀相です。どうする事もできなかつたでしようから」

統括官は僕を見上げて、

「ご苦労だったね、山寺君。明日は、もう少しともな法人だと思

うよ」

「はい」

僕は統括官に頭を下げ、あてがわれた机で書類の整理と報告書の作成をした。

今までの調査で、一番疲れた。そう、藤村さんに初めて会つたあの調査よりも。

そして、また居酒屋にいる僕。田の前には藤村さん。いつも通り、眠つてゐる。

彼女は、僕を信じ切つてゐるのだろうか？ 普通、若い女性が、男と二人きりで、ここまで眠り込むなんて考えられない。それとも、僕の事なんか何とも思つていないから、寝てしまつのかな？

「あれ？」

藤村さんが起きてくれた。僕はホッとしたが、先日の事を思い出し、

「今度はカラオケ行かないからね、藤村さん」

藤村さんはその言葉にバツが悪そうに微笑んだ。

「今日はお開きにしよう」

畳み掛けるように宣言する。すると藤村さんは、

「はい」

と素直に返事をしてくれた。良かつた。何だか凄く可愛かつた。もちろん、普段も可愛いけど。

タクシーを呼び、来るまで待つ。置いて行くと、また眠つてしま

いそうなので、僕は雪山で遭難した心境で藤村さんに話しかけ続けた。

「タクシー来たよ、藤村さん」

「え、うん……」

藤村さんはフランフランしながら外へ出る。

「危なつかしいな」

僕は藤村さんが心配なので、一緒にタクシーに乗った。行く先は何とか告げられたが、とうとう藤村さんは寝入ってしまった。

「困ったなあ」

いくら呼びかけても、全然起きてくれない。やがてタクシーは藤村さんのアパートに着いた。

「ここか」

初めて来た。何故か、ドキドキして来る。

藤村さんをおんぶして、彼女の部屋を探す。一階で助かった。でも、鍵がない。

「つづーん」

その時、奇跡的に藤村さんが目を覚ました。

「藤村さん、鍵は？」

「ああ、開ける」

藤村さんはヒョイと僕の背中から飛び降りて、玄関の鍵を開けると、

「お休みなさい」

と言つて、そのままそこには横になってしまった。

「藤村さん！」

近所の手前、あまり大きな声で呼びかけられない。

「全く……」

仕方なく、手探りで明かりのスイッチを押す。

「わあ」

一人暮らしの女の子の部屋。さすが藤村さんと言つくらい、奇麗に整頓されている。バストイレつき。家賃はいくらくらいだらう?

建物の耐用年数と減価償却費から換算して……。じんじんで悲しい職業病が出てしまつ。

そんな事より、今は彼女をベッドに寝かせないと。

ベッド？ またドキドキして来た。今、目を覚まされたら、確実に僕は疑われそうだ。

「起きないでね、藤村さん」

僕は慎重に彼女を抱き起しつけて、所謂「お姫様抱っこ」で運ぶ。

軽いな、彼女。何キロだろう？

おつと。セクハラか？

僕は妙な妄想をしないようにして、彼女をベッドに寝かせた。

「鍵は？」

玄関を見ると、そこには落としていた。

「ふう」

ホツとしたのも束の間だ。

（ここ）の鍵、どうやって締めればいい？

「これは本当に困った。すると再び奇跡が起る。」

「ああ、ありがと、尼寺君。後は自分でするから」突然起き上がった藤村さんに、僕は外に追い出された。

「ありがとね、尼寺君」

そう言つているが、彼女は間違いなく寝ぼけている。目が半分しか開いていない。

ガチャ。

無情に響くドアのロックの音。

もう僕にはなす術はない。仕方なく、

「お休み、藤村さん」

とだけ声をかけ、アパートを後にした。

そして僕は、藤村さんの事が気になつて、一睡もできなかつた。

でも翌日、

「昨日は『』めん。今度は眠りませんので、懲りずに誘つて下れ。」
と藤村さんがメールをくれた。僕は、
「いやいや、懲りずにお誘いトれ。」
と返した。

今度『』めん。僕は決意した。そつ、今度『』めん、藤村さんとお出で頂くや
ぞ。

調査ファイル11 下山金型の場合

僕は尼寺務。H税務署勤務の税務調査官だ。

先日、隣のN税務署で人が足りなくなり、緊急的措置で僕が異動し、穴埋めをした。

「先方も喜んでいた。良くやつてくれた、尼寺」
統括官に褒められたのは、いつ以来だろう?僕は嬉しくなつてついニヤついた。しかし、統括官の次の言葉で、顔が引きつった。
「だからという訳ではないのだが、お前に正式な異動の辞令が下りた」

「え?」

僕はポカンと口を開けたまま、しばらく言葉を発せられなかつた。
「長野県のI税務署に異動だ。来月からな」
来月。七月。思えば、今月は異動の時期だつた。

「どうした、尼寺?」

統括官はそんな僕の気持ちなど全く察してくれていない。
「国家公務員は、異動があるのは最初からわかっている事だろう?何を今更」

「あ、いえ、異動が不服なのではありません」

僕は慌てて言い訳した。

「何だ、彼女でもできたのか?」

統括官があまりに意外そうな顔で訊いたので、僕は少しだけ傷ついた。

「か、彼女なんていませんよ」

「そうか」

統括官は何故かニヤリとした。

「ならば身軽だな」

「はい」

僕はかしこまつて返事をした。

「異動にはまだ時間がある。それまで、ここで悔いを残さぬようこ仕事をしてくれ」

「わかりました」

僕はお辞儀をして、統括官の席を離れ、自分の席に着いた。

（こんな形でいきなりその機会が訪れるなんて、運命かな？）

僕は、高校時代の片思いの人である藤村蘭子さんに告白しようと思つていた。「異動」のような劇的な事でもなければ、僕のような性格の男は一生決断できない。もし、そんな機会が訪れたら、絶対に藤村さんに告白しよう。そう決めていたのだ。

（それを運命と思うなんて、思い上がりだ）

相手がある事なんだぞ。調子に乗りかけている自分を、別の自分が咎める。

そして、通常の業務に入る。異動の事で頭がいっぱいになつて来て、気がつくと調査先の法人の前にいた。

「下山金型さんか」

一時は、かなり隆盛を極めていた会社だが、代替わりして業績不振に陥つたらしい。二代目の若社長が、所謂「バカ社長」らしく、畠違いの業種にてを出したのが^{つまづ}躓きの始まりのようだ。

「どうしてウチになんか調査に来るんですか？」

調査の連絡をした時、社長にそう言われた。その段階で、下山金型は税理士の顧問契約を解除しており、知らないでその税理士に電話してしまつた僕は、下山金型の担当者だつた人に嫌味を言われた。どうにも嫌な感じがする法人なのだ。先日、N税務署の手伝いで行つた菅物産のような事になつたら困る。それだけは勘弁して欲しいと思つた。

ところが、それ以上に僕を驚かす事が待ち受けていた。

「お待ちしてました」

「本日臨時休業いたします」という手書きの紙が貼られた事務所

のドアを勢い良く開いたのは、藤村さんの愛弟子を自称する錦織つばさんだつた。

「あれ？」

僕は思わずそう言つてしまつた。錦織さんはケラケラ笑つて、

「ウチが、調査立会いだけをお受けしたんですよ。で、尼寺さんが来るつて聞いたので、私が来ました」

「はあ？」

僕は啞然としてしまつた。久しぶりのアニメ声の攻撃に頭が混乱しそうだ。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

僕は身分証を提示し、錦織さんの後ろから現れた下山社長に挨拶した。

「社長の下山です」

僕は下山社長に促され、ソファに座つた。

「電話でもお話しましたが、ウチは本当に赤字企業ですよ。どうして調査なんかに来るのですか？」

社長は不満をぶちまけて來た。僕は愛想笑いをして、

「今回は、反面調査と言いまして、こちらの調査が主ではないのです。他社に関連して、調べたい事がありまして」

反面調査とは、要するに裏取りだ。別の法人の調査をして、ある取引の裏を取りたい時に行うものである。

「なるほど。では、ウチに何かあつたという訳ではないのですね？」

「ええ、そうですね」

僕はそう答えながら、不審に思つた。何だろ？ どうしてそんな事を訊くんだ？ 大体、この調査が反面調査だつてことは、取引先からの連絡で承知しているはず。もちろん、税務署側がその事実を明かす事はないから、知つているだろ？ という推測に過ぎないが。

「では、帳簿類を見させていただけますか？」

「はい」

アニメ声が響く。頭がキンキンする。決して、錦織さんが嫌な人

だとは思わないけど、やっぱあの声は苦手になってしまった。以前は可愛いと思つたけど。

「どうぞ、尼寺さん」

僕の脇に段ボール箱いっぱいの帳簿が置かれた。錦織さんは、二つ口にして下山社長の隣に座る。

「尼寺さんて、錦織さんとお知り合いなんですか？」

下山社長がいきなり訊いて来た。すると錦織さんが、

「はい、以前別の会社の調査でお世話になつた事があります。それと、私の先輩が、尼寺さんの彼女なんです」

「ほオ。 そうなんですか？」

何も知らない下山社長は、すっかり信じてしまった。僕は慌てて、「以前調査でお会いしたのは事実ですが、錦織さんの先輩は、私の彼女ではありません」

「あれ、そなんですか？」

錦織さんはもの凄く意外そうに言った。

「まあ、その辺の細かい事はいいですよ。いずれにしても、貴方と錦織さんはお知り合いなんですね？」

下山社長の顔に狡猾な色が浮かぶ。何だ？

「なら、調査したけど何も出なかつた、といつ事で、本日はすませんか？」

「！」

そういう事か。やっぱりこの社長、何か隠しているな。臨時休業の状態も妙だと思つたけど。

「社長、そんな事言つたらダメですよ。逆効果ですよ」

錦織さんは二つ口したままで下山社長を審めてくれた。しかし

社長は、

「いやいや、そんな建前はいいですから、錦織さん。世の中、そういう折り合いをつけてこそ、うまく行くものです」と言い、僕を見る。嫌な目だ。人を垂らし込もうと心の底が見えるようだ。

「社長、失礼ですが、そんな事を言わるという事は、何か隠したい事があるのですか？」

僕は怯まずに尋ねた。下山社長は、「バカ社長」ではないようだ。強かなのだ。

「まさか。勘織り過ぎですよ、尼寺さん」

彼は僕の名前もしつかり把握している。本当はかなりの切れ者だ。こいつは迂闊な事はできないぞ。

「そうですね。失礼しました」

僕は、ここは一旦引き下がり、本調査の方をもう一度じっくりするべきと判断した。

そして僕は、一通りの確認をすませ、昼前に事務所を出た。

「何だあ、ご馳走してもらおうと思つたのにイ」

アニメ声でそんな事を言われると、余計頭痛がして来る。錦織さんが寂しそうな顔で見送つてくれた。何だか、悪い事をしたような気がしてしまったが、そもそも税務署の調査官が、法人の顧問先の税理士事務所の担当者に食事をご馳走するのは問題なのだ。別に何も悪い事はしていない。そう自分に言い聞かせて、僕は帰署した。

僕の予想通り、下山金型の取引先は、下山金型に空の請求書を書かせて架空の経費を捻出し、その支払に当たたばずの金をプールしていた。下山金型の請求書のナンバーを控え、それを突き合わせて発覚する程度の拙い手口だつた。

多分、H税務署ではこの調査が最後だ。これからは異動のための準備が始まる。

いつもはそんな事はないのに、今日は指が震える。

「明日、いつもの居酒屋で飲みませんか？ 但し、錦織さんと東山さんは誘わないで下さい」

僕は何度も本文を読み直し、藤村さんの携帯に送信した。

できるのか、告白? もうデキドキして来た。

そして当曰。

いつもの座敷で待つていると、藤村さんがやつて來た。

「今晚は」

藤村さんがいつも増して奇麗に見える。胸が高鳴る。

「こ、今晚は」

変な緊張感が僕をあこらなくしている。何となくだが、藤村さんの目が不審そうだ。

「今日は絶対に眠らないから、よろしくね」

藤村さんは一ヶ「リして、僕の向かいに座る。僕は居すまいを正して、

「うん。今日は本当に眠らないで欲しいんだ」

「そう?」

そしていつものようにどうどういう事はない一人だけの飲み会が始まる。「一人だけ」と言つと、何か良い感じの響きだが、そんな事は微塵もない。

気がつくと、僕は飲めないはずのビールを飲み干していた。藤村さんがポカンとした顔で僕を見ている。

「大丈夫、尼寺君?」

藤村さんが心配そうに尋ねてくれた。

「だ、大丈夫。平気だから」

そう言いながらも、顔が火照っているのが自分でもわかる。今日は僕が潰れる番だらうか?

「あ

気がつくと、僕はいつの間にか寮に戻っていた。もう深夜の一時だ。

「うわあ

何がどうしたのか、全くわからない。どうしよう、藤村さんに

後で連絡しようか？

「あ」

携帯にメールが来ている。藤村さんからだ。

「うわ

思わず叫んでしまった。

「今度はアルコール抜きでお話しましょ」

藤村さん、怒ってるのかな？ でも怒っているのなら、いつにいつメールはよこしてくれないよな。

でも、僕は藤村さんに何を話したのだ？ その方が心配だった。

いざれにしても、時間がないんだ。黙動の前に告白する。それだけは何としても成し遂げよう。

僕は尼寺務。H税務署勤務の調査官だ。

先日、上司である統括官から異動の辞令が下りた事を告げられた。そして、それに後押ししてもらう形で、高校時代の、いや、高校時代からの片思いの人である藤村蘭子さんに告白する事にした。どうにか居酒屋に舞台を設定して、いざ藤村さんに告白しようと意気込んだのだが、あまりの緊張に飲めないビールをあおってしまった。途中から記憶を失ってしまった。

後で送られて来た藤村さんのメールを見る限り、僕は何も言えなかつたようだ。本当に情けなくて、涙が出そうだった。

翌日から、僕は引継ぎやら何やらで忙しく、藤村さんにお詫びの電話もできずにいた。メールで済ませるのは気が引けたので、電話で言おうと思っていたのだが、想像以上に残務整理と異動準備に時間を取りられ、思つようにできず、もどかしかつた。

「どうした、尼寺？ 元気がないな」

統括官が廊下で後ろから声をかけて來た。

「そ、そうですか？」

僕は田の下にできた隈くまを自覚しないまま、統括官を見た。統括官は呆れ顔で、

「異動する前からそんな調子では、先が思いやられるぞ、尼寺。何か悩み事もあるのか？」

「いえ、その、個人的な事ですか……」

僕は統括官に恋の悩みを相談しても仕方ないと想い、そう言つた。すると統括官は、

「あのなあ。身も蓋もない言い方をするなよ。これでも、職場では親代わりのつもりなんだぞ」

「ああ、申し訳ありません」

僕は統括官のその言葉で反省し、相談してみた。

「そうか。なるほどな」

やはり、いくら統括官でもこんな個人的な悩みは解決しようがないだろう。そう思つて悩みを聞いてもらつたお礼を言おうとした時、「少なくとも彼女は、お前を嫌つてはいないで、尼寺」

「は？」

どうしてそんな事がわかるの？

「私の経験では、もし、本当にお前の事が嫌いなら、メールもよこさないだろ？し、飲みに行つたりしないはずだ。そうだろ？」

「はあ」

僕はそんな楽天的に考えられないで、あいまいな返事をした。
「お前のいけないところは、何でも後ろ向きに考えるところだ。もう少し、自分に自信を持て。いや、恋愛に関しては、少し自信過剰で構わんと思う」

「え？ そうなんですか？」

統括官は一ヤリとして、

「そうだよ。それくらいでないと、女性の心は掴めんぞ、尼寺」

「はあ」

それでも僕は後ろ向きだつた。

「何より、そんな状態のままで工税務署に行かれたら、あちらにも迷惑がかかる。万全の態勢にして、異動する事だ。いいな？」

統括官の業務命令張りの言い回しに、僕は直立不動になり、

「はい！」

と答えた。

そうは言つたものの、相変わらず自信がない。藤村さんに鼻で笑われて終わりのよつな気がしてしまい、決断ができない。それに、先日、記憶を失くしていた間、僕は本当に彼女に何も言わなかつたのか、心配だ。

僕はモヤモヤしたまま、署を出た。そのまま寮に帰る氣にもなれず、街に足を向ける。ぱつたり藤村さんと会つたらどうしようなどと考える余裕すらなかつたのだ。

藤村さんは会わなかつたが、ある意味それ以上に会いたくない人達と顔を合わせてしまつた。

「あれえ、今日は一人なんですか、尼寺さん？」

アニメ声が辺りに響く。尼寺という奴はどうだ、という感じで、周囲にいる人達が見回す。

「はあ」

僕は思わず溜息を吐いた。

「ああ、ひつじい、尼寺さんてば。今、溜息吐いたでしょ？」
僕は仕方なく声の主の方を見た。そこには、アニメ声の錦織さんと、深窓の令嬢風でいて、その実酒乱の東山さんがいた。一人共、妙に嬉しそうなのが気になる。

「あ、こ、こんにちは」

僕は顔を引きつらせながら言った。すると東山さんが、

「そうだ、お祝い言わなくちや。おめでとうござります」

「は？」

唐突にそんな事を言われると、何に対してなのか全然わからない。まさか、僕が異動なのを知つていて、嫌味を言つたのか？ でも、そんな事知つてる訳ないしなあ。変だ。東山さんはそれでも二二二二口したままで、

「先輩にプロポーズしたんですね？」

「は？」

プロポーズ？ 先輩？ 藤村さんの事？ どこでどう間違えると、

そんな話になるんだ？

「し、してないですよ、まだ……」

まだとか言つてしまつた。僕は頃垂れた。してやつたり顔の東山さんと錦織さんは、ハイタッチをして喜んでいる。

「ここでは何ですから、どこかに入りましょうよ、尼寺さん」

「はあ」

確かに、錦織さんの特徴のある声のせいでのだかりができるていたので、僕達は近くのファミレスに入った。

「わーい、『駆走』『駆走』

錦織さんがはしゃぎながら席に着く。

「あ、その、僕、持ち合わせがないので……」

慌てて「自主申告」すると、東山さんが、

「そんな失礼な事しませんよ、尼寺さん。今日はお祝いなんですか
ら、私達が出しますよ」

「いや、だから、プロポーズなんてしてないですから、お祝いもい
いですよ」

僕は慌てていた。もじこのまま彼女達の「接待」を受けた事が藤
村さんの耳に入れば、相当気分を害する事になる。それだけは困る
のだ。

「でも、いざれするんでしょ、尼寺さん？」

東山さんが真剣な表情で言つ。僕はビクッとした。

「だったら、何も問題ないじゃないですか。お祝いしちゃつてOK
ですよ」

錦織さんがメニューを広げた。

「いや、その、藤村さんの事を無視して、僕だけ勝手にお祝いって
訳にはいかないですよ」

僕は何とか冷静になろうと努力しながら、一人を説き伏せようと
頑張った。ところが、

「だって、先輩、毎日嬉しそうなんですよ」

錦織さんも真顔で言つ。

「は？」

僕はキヨトンとした。錦織さんはまた一コツとして、

「実はですねえ、私、尼寺さんが先輩に告白しているのをいつそり
見ていたんですよ、あの居酒屋で」

「えええつー？」

僕は仰天した。錦織さんに見られていたという事実より、僕が藤村さんに告白したという事実が衝撃だった。酔った状態で、藤村さんに告白していたのか……。だから、彼女は、「今度はアルコール抜きでお話しましょう」とメールを送つて来たのか。あれ？ という事は？

「あの日以来、先輩がニヤついているのを何度も見てるんです。聞いても誤魔化されちゃうんですけど、丸分かりですよ」

東山さんが言った。そうなのか。そうなんだ。

「アハハ、わっかりやすいなあ、尼寺さん。急に嬉しそうな顔になつた！」

錦織さんに指摘され、僕は顔が火照るのを感じた。

「先輩は、待つてるんですよ、尼寺さん」

東山さんも微笑んでいる。

「今度は、ノンアルコールで告白ターイムですよ、尼寺さん」

錦織さんが丶サインを出して言つてくれた。僕は泣きそうなくらい嬉しくなつたので、

「今日はやつぱり僕がご馳走しますよ」

「わーい！ 一食助かるウ」

錦織さんは現金だ。東山さんは、

「そういう訳には行きません。」と馳走すると言つたのですから、私達が支払をします」

「美奈つたら、変などこで強情なんだから」

錦織さんは口を尖らせた。どうやら彼女はご馳走はするよりされる方がお好みらしい。

「まあまあ。今回は僕が出しますから」

東山さんも折れてくれた。そして僕は、財布が空になつた。

錦織さんと東山さんは、その後カラオケに行くらしかつたが、僕は丁重にお断りして、寮に帰つた。

藤村さんが、僕の告白を待っている。その可能性は百パーセントではないが、光は見えた気がした。たまには楽天的になつてみようかな？ そう思った。

そして翌日。

今日も引継ぎ書を作成したり、報告書を上げたりで、大忙しだ。異動がこれほど骨が折れるものだとは思つていなかつた。しばらくしたくないな、と思つたほどだ。

今日のメインイベントはこれからだ。僕は署を出ると、携帯を取り出した。そして、藤村さんの携帯にかける。

「はい」

藤村さんの声は弾んでいるように思えた。気のせいだろ？ けど。

「ふ、藤村さん、話があります。これから会えませんか？」

僕はつつかえながらも何とか言い切つた。

「ええ。どこですか？」

藤村さんの声が不審そつだ。それはそつだよな、唐突過ぎる切り出し方だもんな。

「税務署の近くに」「コーヒー・ショップがあります。そこで待つてます」それでも僕は、押しの一手で続けた。

「わかりました」

何だか事務的な口調だ。藤村さん、本当に僕の告白を待つてくれていたのだろうか？ たちまち不安になつてしまつた。しかし、もう言つてしまつたのだ。今更戻りはできない。

「よし！」

僕は意を決してコーヒー・ショップに向かつた。

「コーヒー・ショップの窓際の席で向かい合つて座る僕と藤村さん。何かとも緊張して來た。

「すみません、急に呼び出して

乾き切った口を何とか開いた。喉が焼けるようだ。

「いえ。何でしちゃうか？」

藤村さんの態度は、まるで調査立会いの時のように、だんだん自信が失われて行く。不安だ。

「この前は、酔い潰れてしまつて、申し訳ありませんでした」

とにかく、詫びておかなければならぬ。本題はその後だ。

「その事なら気にしないで、尼寺君。私が散々迷惑をかけているんだから」

藤村さんは苦笑いした。あ！ 今の僕の言葉、嫌味だつたかな？
「はあ」

頭を搔いて引きつりながら笑う。藤村さんの表情がちょっとだけ変化した気がした。

「あの」

僕は居すまいを正して藤村さんを見た。

「はい」

「僕、実は今月で異動になるんだ」

よし、うまく言えた。

「え？」

藤村さんは意外そうな顔をした。それはそうだよね。

「長野県の工税務署に行く事になつたんだ。それで、どうしても、その前に藤村さんに話しておきたい事があつて……」

藤村さんはスッと背筋を伸ばした。僕も緊張する。

「藤村さん」

僕は真っ直ぐ藤村さんを見た。ああ、奇麗な人だ。こんな美人に告白しようだなんて、今更ながら身の程知らずな気がして来る。藤

村さんも目を逸らさないで、僕を見つめてくれている。

「貴女の事が大好きです。僕と付き合つていただけませんか？」

「言えた！ 言えたぞ！ 心の中でガツツポーズをした。

「え？」「

ギクッとした。藤村さんが泣いている。わわ！ しぶじつたか？「藤村さん、泣かないで。」めん、僕が急に変な事を言つたから……

僕はすっかり氣が動転してしまつた。すると藤村さん「口」として、

「違つ。違つの、尼寺君。嬉しいの。嬉しいから、泣いてるのよ」

「……」

僕は固まつた。動けなくなつた。藤村さんが、涙を拭いながら、

「尼寺君？」

でも僕は硬直したままだ。反応しようとも、身体が言つ事を聞かない。

「尼寺君……」

藤村さんのその凛とした声で、僕はようやく硬直が解けた。

「はい。じつらこそ、よろしくお願いします」

藤村さんが言つた。

「藤村さん……」

今度は僕が泣いてしまつた。恥ずかしいなんて思つ余裕がなかつた。号泣した。

「ああ、尼寺君……」

藤村さんも泣いている。ああ、夢じやない。夢じやないんだ。僕はよつやく喜びを噛み締める事ができた。

「どうぞ、遠慮しないで」

告白したその日に藤村さんのアパートに行くなんて、彼女の「西親に知られたら怒られそうだ。」

「は、はー」

僕はドキドキして靴を脱いだ。ここは一度だけ、前回とは繋

張感が違う。

「これから、忙しくなるわね、尼寺君」

「あ、うん、そうだね」

さつきからずっと上の空で返事をしている気がした。それでも何とか、

「藤村さんに、一緒に来て欲しいなんて、とても言えないし、こんなタイミングで告白したのを申し訳ないと思つてます」

僕は頭を下げた。藤村さんは笑つて、

「大袈裟よ、全く。きつかけが欲しかったんでしょ？」

「うん……」

僕は恥ずかしくなつた。藤村さんはクスッと笑つて、
「私は一緒にには行けないけど」

「やつぱり……」

わかつていたけど、そう言われると落ち込むなあ。まあ、無理に決まつてゐるのだから、それは僕の身勝手というモノだ。

「一緒にには行けないけど、いろいろ片付けたら、追いかける」

藤村さんが、本当に軽く言つた。

「え？」

僕は多分、呆けたような顔をしていたと思つ。藤村さんはクスッと笑つて、

「何よ、後から行くと迷惑なの？」

「そ、そんな事ないよ！」

あれ、何か、懐かしい感じのやり取りだ。僕は調子に乗つてみた。
「あ、あの」

「何？」

藤村さんがギクッとした顔で僕を見上げた。僕が嫌らしい事を考えたと思つたんだろうな。

「抱きしめていいですか？」

言い出しにくい状況だつたけど、何とか言えた。藤村さんは笑い出しつて、

「はい」

僕は心臓が壊れるんじゃないかと思つてから「ドキドキしながら、

彼女を抱きしめた。ああ、女の子つていい匂いがするし、こんなに柔らかいんだ。

「尼寺君」

「藤村さん」

藤村さんが僕を見る。

「ねえ、苗字で呼び合つの、やめにしない?」

「え?」

ドキッとした。

「ね、務」

僕は卒倒しそうだつた。藤村さんが僕の名前を呼んでくれた。そう思つだけで、頭がパンクしそうだ。

「ら、蘭子さん」

僕も思い切つて言つた。

「だから、さんは付けない!」

いきなりのダメ出し。

「は、はい!」

ああ。やつぱりこんな感じなのかな、僕達つて……。

その日はもちらん、寮に帰つた。いくら何でも、いきなりのお泊りはまずい。

そして数日後、僕は長野へと出発する事になつた。藤村さんは駅まで見送りに来てくれた。

「私も、片づけがすんだら、すぐ行くから

「慌てなくていいよ、蘭子さん」

「だから、さんは付けない!」

「あ、はい!」

そんな感じで、僕は長野を目指した。

【】税務署は、今までいたH税務署に比べると、法人軒数は十分の

「にも満たない。毎日が長閑^{のどか}で、ゆったりとしていた。
「どうかね、尼寺君。こっちの暮らしは慣れたかね？」

統括官が言った。

「はい、おかげさまで、すっかり順応できました」

僕は笑顔で答えた。

「そうかそうか。それは良かつた。H税務署に比べると、随分と寂しいだろうが、頑張つてくれたまえ」

「はい」

周囲の人達は皆良い人ばかりで、本当に安心した。

そしてその日の業務は終了^しし、僕は署を出た。本来なら、寮に入るべきなのだが、

「後から彼女が来るので……」

と恥ずかしいのを我慢して統括官に事情を説明し、アパートを借りた。

「あれ？」

アパートが見えるところまで来ると、僕の部屋に明かりが点いている。

「ああ！」

僕は駆け出した。こんなにも心地良いのは生まれて初めてだ。

「只今」

玄関のドアを開くなり、言つた。

「お帰りなさい、務[」]

蘭子さん、あいや、蘭子が料理をしながら、僕を迎えてくれた。来るのなら、連絡してくれれば良かったのに

「驚かそうと思つたのよ」

蘭子は屈託のない笑顔で言つ。

「そう？ ああ、いい匂い」

「母に教えてもらつた藤村家のお袋の味よ。美味しいんだから」

蘭子は嬉しそうに言つた。僕もニコツとして、

「おお、じゃあ、期待しちゃうぞ
「任せときなさい！」

彼女はポンと胸を叩いた。

これから始まるんだ。僕と蘭子の、新しい人生が。夢のようだけ
ど、夢じゃない。

本当にありがとう、蘭子。絶対に幸せになろうね。

以上でお読みください、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8946k/>

新米税務調査官尼寺務の奮闘日記

2011年10月27日03時27分発行